

第2回全国同人雑誌最優秀賞決定

まほろば賞

全国同人雑誌振興会・文芸思潮による第二回全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」の選考会が八月九日東京青梅の「かんぼの宿・青梅」で行なわれました。

全国からの事前投票者八名をもとに、当日参加選考委員一五名、特別選考委員七名により、候補作「セラピープロジェクト」(木戸順子)、「弦」(82号)、「海辺の家」(近藤勲公)、「日田文学」(53号)、「それぞれの深紅」(遠野明子)、「槐」(25号)、「賀状」(鈴木信一)、「文芸東北」(502号)、「蜘蛛の部屋」(谷口葉子)、「カプリチオ」(26号)、「風景―イヌイットの皮袋―」(山口馨)、「渤海」(54号)、「魚の時間」(中山茅集子)、「ふくやま文学」(20号)の作品について激しい議論が交わされました。

それに基づいた投票の結果、第二回全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」は鈴木信一氏の「賀状」と決定いたしました。また僅差の次点として近藤勲公氏の「海辺の家」に、特別賞を贈ることになりました。

また「セラピープロジェクト」(木戸順子)、「それぞれの深紅」(遠野明子)、「蜘蛛の部屋」(谷口葉子)、「風景―イヌイットの皮袋―」(山口馨)、「魚の時間」(中山茅集子)は、優秀賞として賞揚することになりました。ここに決定とその内容を報告し、受賞作品を賞賛したいと思います。

「まほろば賞」受賞作品には、賞状と賞金十万円(堀内守氏・山川京子氏などの寄付によるものです)、記念トロフィー、記念品(吉川英治色紙)を贈らせていただきました。特別賞には、賞状・賞金二万円・記念トロフィー・記念品などを、また優秀賞には、賞状・賞金一万円・記念メダルを授与させていただきました。

今後も全国の同人雑誌の中から優れた作品が生まれることを祈願し、たくさんの方の同人雑誌の作品が全国同人雑誌振興会・文芸思潮に寄せられてくることを期待しております。第三回の全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」対象の同人雑誌は二〇〇六年一月一日より二〇〇八年十二月三十一日までの発行の同人雑誌とさせていただきます。奮って御応募ください。

また、どうぞ公開選考や投票にも多数の方が御参加くださり、自らのお手で同人雑誌の優秀作品を育てていただきたいと思います。

なお、現在全国同人雑誌最優秀賞は、昨年親しみやすい名前を公募した結果「まほろば賞」と呼称することになりました。この名前で同人雑誌最優秀賞に親しんでいただけましたら幸いです。

(全国同人雑誌振興会／文芸思潮)

全国同人雑誌最優秀賞

まほろば賞

「賀状」 鈴木信一 (「文芸東北」502号)

特別賞

「海辺の家」 近藤勲公 (「日田文学」53号)

優秀賞

「セラピープロジェクト」 木戸順子 (「弦」82号)

「それぞれの深紅」 遠野明子 (「槐」25号)

「蜘蛛の部屋」 谷口葉子 (「カプリチオ」26号)

「風景―イヌイットの皮袋―」 山口馨 (「渤海」54号)

「魚の時間」 中山茅集子 (「ふくやま文学」20号)

まとまった文章など書いたこともなかったくせに、私には「書くこと」に対する確信だけがありました。そこで、ある日、自家製文章読本と称して、「書くこと」についての自分の考えを原稿用紙に一気にとめ上げることになりました。小説を書き始めたのはそれからです。自分の考えが正しいことを証明するには、自分が書いて見せるしかないと思ったのです。いま思えば、なんて傲慢な、なんてふしだらな動機でしょう。

しかし、心配はご無用です。小説はそんな浅薄の輩やからを決していい気にはさせておきません。そうです。私は何度挑戦しても、小説で結果を出すことはできなかったのです。だからでしょうか。私は一方で、小説を書くといふこの困難な仕事に、いつの間にかはまり込んでいました。「書くこと」の中にある恍惚と不安、すなわち魔物を見てしまったのです。そして、気づいたときには、十年の歳月が流れておりました。

過日、自家製文章読本は、『800字を書く力』（祥伝社新書）となつてやっと世に出ることができました。しかし、小説との闘いは始まったばかりという気がしております。また、自分がまだまだ未熟であることも、このたびは思い知りました。「まほろば賞」の公開選考会は議論百出、と



鈴木信一

でも素晴らしいもので、先生方の批評の確かさに舌を巻きながら、自分自身何度も反省いたしました。「まほろば賞」の公開選考会に立ち会えたことは、あるいは賞を頂戴したこと以上に貴重なことだったのかもしれない。

さて、拙作にお目を留めてくださった「芸芸思潮」の存在がなければ、今回のことは何も始まりませんでした。「芸芸思潮」の全国同人雑誌評および全国同人雑誌振興会の方々には、あらためて感謝申し上げます。また、選考委員の先生方や関係の方々にも、この場を借りて御礼申し上げます。賞の名を汚さぬよう一層精進してまいります。みなさま、今後ともどうかご指導をよろしくお願いいたします。

今回の特別賞受賞にあたって日田文学の江川先生をはじめ関係者各位に厚くお礼申し上げます。

私は大分県の津久見市、東九州独特のリアス式海岸と海に迫る密柑山の狭間にひろがる地域で、JA（農協）職員として長年勤務しております。

過疎の進む市でも、担当してきた半島部は特に高齢化が進み、作品「海辺の家」に描かれるような老老介護の家が各浦々に実態として点在しております。その環境でJAの介護事業に携わり、地域の高齢化問題がいかに深刻なものであるかを実感し、それが「海辺の家」のモチーフとなっています。

主人公の安西ノキには実在のモデルがおり、やはり高齢の配偶者の介護をしておりますが、作品に描いた程深刻な状態ではありません。昔と比べれば介護保険による体制の充実はかなり浸透してきておりますが、これから訪れる超高齢化社会が個人の人生にどのようなドラマをもたらすのか、それを把握し今後の創作のヒントにできるかは、ひとつの課題だと思います。

いずれにしてもこの作品が評価をいただいたことで、次の創作への意欲を喚起させていただいたことに深く感謝いたします。



近藤勲公

こんどう のりひろ

1958 大分県津久見市生まれ
1992,1997,2000 九州芸術祭文学賞大分県地区代表
「日田文学」同人
JA 大分県合併事務局勤務



海辺の家

近藤勲公

1

七十八歳が八十五歳を介護している。

その家は海辺の砂浜の一角にあり、打ち寄せる波の裾がいつも堤防に砕け泡状の飛沫がかかる土手の上に建っていた。

土くれが年季の入った屋根瓦の隙間からはみ出し、波打つ軒の節々からのびる雑草の先端が、濡れた頭髮のように垂れさがっていた。

安西ノキが夫の茂市の介護をはじめたのは十年程前からである。夫は当初杖をつきながらの三点歩行で鶏小屋や畑の猪の囲いを手直ししつつ見回る程度の体力を発揮していたが、七年前に磯の岩場で足がもつれたたかに頭部と背

中を強打すると、そのままベッドからおきあがれなくなつた。

若いうちから野良仕事で鍛えた足腰と腕力でノキの介護力はどうかマグロのように力なく寝そべったままの茂市の半身を返し、排泄物を処理するだけの力を残していたが、このところは抱き起こすだけでも相当に背中や足腰が悲鳴をあげるようになった。

奥座敷に横たわる茂市はすでに自力で立ち上がることができず、ここしばらくはノキの体力にあわせて大小便もあてがわれたオムツに垂れ流されるままになることが多かった。

そういう時、明け方の差込みの薄ぼんやりした光の輪の中で首や手足を小さく痙攣させる茂市の姿は、ノキには体

力を使い果たし修行を終えた修験者のように見えることもあった。

それは長年にわたり半農半漁の浦で他に迎合せず腕一本で生きてきた夫の生き様が、強くノキ自身の人生観に投影されているせいでもあった。それだけに、もはや他人の手を借りなければ用足し一つできない夫の姿を振り返った時、逃れようのない老いの切なさや悲哀が、ノキの背後にも忍び寄るのだった。

漆も剥げ落ちた柱時計の定刻の打針に充血した目をぎょろりと向ける時だけ茂市の瞳に輝きもどる。

ヘルパーを待っているのだ。既に杖をつきはじめてノキの体力ではいつか共倒れになってしまうかもしれないリスクを考慮し、町の福祉センターに依頼し、慣れない介護の手続きをやつと済ませ、身体介護と生活支援のヘルパーにきてもらおうようになったのだった。

ネックになったのは、近隣の浦々から離れた僻地の一軒家であるということだった。

もともと偏屈で変わり者の茂市がながあつても転居しなかつた家屋は崖下にあり、至る道は風雪に曲がりくねつた松が点在する岩肌を削り取つた細道を降りてくる以外にない。しかも茂市の若い時分からの評判は流布しており、市から照会をうけたいくつかの福祉施設は事前調査で難色をしめし、すぐに引き受けるところがなかなかみつからな

かった。

それでもノキがあちこち頭を下げケアマネージャーにきてもらい、介護の認定がおり、やつとヘルパーの派遣が現実になったのは、夫とちがつて常に腰の低いノキの人柄にあったのかもしれない。長年の夫婦生活の中で培われた防衛本能のようなものが身についており、それで窮地を脱することも多かった。

ただ、この家の時間の流れに他人が入り込み直接干渉するのは初めてのことであり、それが細波のように老夫婦の感情に波紋をひろげつつあった。

夫が動けなくなつても長年の生活習慣はかわらない。天気の良い朝は沖合の水平線に引かれた暁の細帯が太さをますますにつれ、浮遊していた薄墨色の綿雲がオレンジ色に染まり始める頃から、既に鳴きはじめて鶏小屋の掃除と餌やりにかかり、生みたての卵をひろい、裏畑の野菜の生育を見て、猪やタヌキの被害をうけていないか確かめ、その日の食事に必要なだけのネギをむしりとる。

ひととおり家の周囲を回り、散乱した薪を積みなおし、漁網をたたみ、放つておいた鍬や鎌を小屋に戻した後、裏手の井戸から水を汲み、家に戻る。竈に火をいれ、前日の夜から仕込んでいた味噌汁の鍋に具を入れ、竈にかける。水道はきいているが、味噌汁に使う水だけ井戸水を使うのは、祖母の頃からの習慣だった。

米を二合とき隣の火口にのせ、竈の火が目覚め勢いを取り戻し始めた頃、天日していたアジの干物を一度軽く水洗いしコンロの網の上に置く。瓶壺から長年つけこんでいた梅干とタクアンをとりだし小皿にのせる。

盆に小皿と小さく盛りつけた飯を盛ると、おぼつかない足取りで仏壇に置き、手を合わせる。

それから奥座敷へいく。既に目覚めていた茂市が障子から差し込む薄あかりの中で祈るように見つめている。部屋に排泄の匂いが充滿している。

ノキがチリ紙と新聞紙とオムツを手近づいていくと、こころなし腰を僅かに持ち上げる仕事をする。

朝だけはノキが排泄の処理をしなければならぬ。いつか自分もこうなるかもしれないと考え、行き場のない不安がこみあげ厭世観にかられることもあったが、じつと見つめる夫の目の奥に自分を頼るしかないのだという幼子に似た思いを見てとると、そういう感傷に浸るわけにもいかなかった。

蒲団をめくると匂いがいつそうきつくなる。

「厭な顔をしてはいけませんよ。いちばんつらいのは本人なんですから」と社会福祉士に言われてから、つとめて無表情に処理するようにしている。

両手を胸の前で組ませ、膝を曲げ膝頭と肩をもち手前に引くとノキの力でも痩せた茂市の身体は簡単に横向きにな

る。

浴衣をめくりあげ、腰のあたりにシートを敷きその上に新聞紙を広げ、漏れがないよう敷布団と身体の間までさしこみ、おもむろにオムツを取る。

匂いにはもうなれてはいるが、仙骨のあたりに床ずれの痕がある。赤黒いクレーターに似た肌の傷がかさぶたに覆われている。あちこちにあるが、ヘルパーがきてほとんどなおりにかけている。ノキひとりでは対応しきれず一時は膿が敷布まで染み出し、痛みに一晚中うめいていたのだ。

排泄物をオムツにくるみチリ紙と濡らした布で局部を拭く。若い頃は引き締まって禪の似合っていた夫の尻からはげっそりと肉が削げ落ち、皮膚は赤くざらめいていた。

ひととおり拭くと新聞紙ごと丸め、汚物を取り去り、新しいオムツを腰の下に敷きこみ前部の粘着テープをはがしひろげる。そのまま茂市の身体を倒す。オムツをとりさつたまま仰向けになった茂市は局部をさらしている。白いものがまじった陰毛の中で茂市自身が申し訳なさそうにちぢこまっている。これが反応を示したのをノキが最後に見たのはどれくらい前だったろうか。若い頃恐くなるほど毎晩隆起し続け、一度や二度では萎えることを知らなかった夫自身は、今では排尿以外に何の役にもたない。

ちらと顔を見ると無表情にただ天井を見つめている。釣り上げられ観念した魚の顔のように感情のゆらめきがな

い。

そういうものか、とふと口元に笑みが浮かぶ。

足を広げた茂市のまたぐらから伸ばしたオムツの前部をぐいと引き上げ、局部を覆い隠すと、なんとなくほっとした空気が漂う。

別に声も発さず表情一つかえることもないのに、開け放した襖の向こうからざわめく潮騒がやと耳に届いてくる気がした。

ベッドの手すりの助けをかりながら浴衣を着替えさせ、ようやく朝食が始まる。これを毎朝、毎日繰り返している。

いつ果てるかもしれない習慣。持続する介護。それでもノキはこれが自分の生きている証なのだと思っていた。これが自分の生の意味なのだといきかせながらここまで忍んできたのだ。

だが、ひたひたと蓄積される加齢には逆らうことはできない。鍛えられた足腰は曲がり、筋肉は細り、骨はもろくなり、目がかすみ、頭髮は抜け落ち、徐々に夫と肉体的距離が近くなる。

それに物忘れがひどくなる。幼い頃の記憶は古いアルバムに貼られたセピア色の写真のごとく思い出せるが、それ以後のことが最近に至るまで、ぶつ切りされた映画のフィルムのように思い出せない。脳裏に描こうとしても記憶のところどころがとび、忘却の暗幕に覆われてしまう。

どうしても思い出したい時、一人で海を眺め続ける。すると心が白紙に至り、ビン底の淀みをかきまわすように記憶がふわりと浮きあがることがある。

ある夕暮れ、水平線を目が痛くなるほど血のような赤色ににじませながら沈んでゆく夕日を見て、自分たちは徐々に骸に近づいているのだ、と思った。

海の果てにどこへゆくのか、舞い落ちる紙片に似た鳥影の群れを見て、頭の手ぬぐいを取り数珠にみためて拍手にはさみ夕日に向かって祈ると、人生を超越した存在を感じることがあった。

やがて冬になると海鳥たちがどこからともなく集まってきた凍える海上を乱舞し、風につて鳴きながら時折水面をかすめてはなにがしかの獲物を掴み飛んでゆく。かとおもうと、不自然な角度でとびこみ、暫くしてぶかりと横向きに浮かび上がってくるやつもいて、そういう鳥がしばらくして海岸にうちよせられると、ノキは拾い、崖下の土の中に埋葬してやるのだ。

鳥だけではない、家の近隣で死んだイタチやタヌキなどの動物の死骸をみつけるとノキはよほど腐乱していないかぎり拾い集めては崖下に埋め、花の種を蒔いた。それをもう何十年も繰り返しているものだから、崖下の柔らかな土の部分に添って四季ごとに咲く混合種の見事な花のラインができていた。

花々の下には死骸が埋っていて、花はその生まれ変わりの姿なのだ、ノキはいつしか思うようになっていた。人の命も生まれ変わるのだ。死に、生まれ、また死ぬ。こんな単純な事実に誰も彼もとまどい、嘆き、悲嘆にくれる。

長年寝たきりの夫の姿はある意味、そのような輪廻の輪に落ちることに抗っているように見える。

赤子のオムツには未来がある。可能性と再び新たな命を生み出す活力を秘めている。老人のにはそれがない。やがて確実に訪れる終焉に向かつてじわじわと命を削りとられてゆくだけだ。

だが、その人間が生き抜いてきた過去に対してこそ介護をおこなう価値があり、また、尊厳があるのだ、と思う。

意味のない人生を送ってきた人間などない。懸命に生き、世に足跡を残した果ての現実ならば、それだけの敬意をばらって余命を扱うべきなのだ、とノキはずっと前から自分に言い聞かせていた。

海岸を吹き渡る熱風が日が落ちてようやく涼風と入れ替わりはじめる頃、風呂にはいつていたノキは、ふと風呂場の窓から見える満月を背景に窓枠の上で交尾する虫らを見つめ、観察しているうちに枯れた泉にじわりと潤いが湧き出る自分を突如感じ、とまどいながら顔のほてりに熱さが増すのを覚えた。

夫の部屋へいき、床ずれができないように横向きに姿勢をかえてやる。毎晩いつのまにか寝入ってしまう茂市は、無言のまま、見開いた目でノキをみている。今夜はとくにはだけ胸元をみている。既にしなびて張りもなく、ふくらみも形骸となつてしまった乳房でも、あらわになると視線がいくものらしい。

ノキはオムツをかえる際にいつもより丁寧で夫の陰部を拭いた。触れた妻の指によって左右にふられた陰部はわずかに自力で蠢いたが、それだけだった。それ以上膨張も、屹立もしなかった。いつものように白いものが勝る陰毛に埋没し、眠るイソギンチャクのように皮にくるまっていた。ノキは夫に悟られないようため息をついた。

この人はもう、男ではないのだという認識が改めて湧き起り、くすぶっていた灰の中のほてりが次第に冷めていくのを感じた。

今更交合をしたいとは思わなかったが、男の腕の中で眠りたいと思うことはあった。

遠い、遠い日、毎夜毎夜この目の前に横たわる男の腕の中で狂おしく喘ぎつづけた自分が幻であったような気がした。

何の甲虫だろうか、開け放した窓の棧の上で月明かりに透らたら丸い体を虹色にそめ、二匹が上になり下になりくんずほぐれつしながら絡み合う姿をみて、若く激しかった夫の性を思い出し、自分も負けずに求めたのだ、という思いが我知らずノキの局部を刺激した。

やがて、メスのほうか、オスカ、行為を終えたらしい片方がもぞもぞと手足を数度伸縮させ甲羅の下の薄羽を整えたかと思うと、弾けるように窓の外へ飛んでいつてしまった。残された一匹は手持ちぶさたらしく暫く棧の上をうろろしていたが、ポロリと足を踏み外し、わずかな手足で窓の縁にぶらさがり格好になった。自力で飛ぶことができないのか、数度広げた羽の縁がちりめんのように収縮しているのだった。

ノキがそつと手を伸ばし、再び棧の上に戻してやると、虫はしばらくそこにじつとしていたが、やがて再び動き出し、今度は窓の外側にぼろりと落ちてしまった。

その様子をずっと眺めていたせいか、全身が湯の熱気に赤らみ、風呂からでると縁側で襦袢の胸元をはだけて団扇で髪をかわかしながら、ひととき大きく見える海上の月を暫く見上げていた。

潮騒にのつた涼風が白髪をゆらすと、沖合の漁火がちらちらとまたたき、晴れわたった夜空の星々が合わせるようにリズムをとるのだった。

朝もやのかかる崖のつづら道を淡いピンク色の服がおりてくる。町の「ひまわり福祉センター」から派遣されたヘルパーの制服は、暗褐色の岩肌にとまどい立っていた。

ノキは険しい道を自分たちのために遠くから交代でやってきてくれる三人のヘルパーたちに感謝していたが、いまやつてくる一番若い娘には複雑な思いを抱いていた。

「おはようございます」

息をはずませながらちよつと八重歯を覗かせて明るく笑う。

魅力的な娘だ。

二十代だろう。細身で中背だが、目鼻立ちがはっきりしていて、笑うと大きな瞳の目じりが大きくさがる。カールした髪をバンタナでとめ、介護ユニフォームの肩口から下着の紐がちらちら見え隠れしている。

「おはよう、美智子さん」

ノキが曲がった腰を杖で支えながらさらに会釈し、しわがれ声で返事をする、その工藤美智子という名の若いヘルパーはびよこりと頭を下げ、その拍子に手首までずりおちたシオルダーバッグをあわててずりあげた。

「ご主人の様子はどうですか？」

辺鄙な場所への派遣であるにもかかわらず明るく屈託がない。介護経験は他の二人のベテランヘルパーに比べると

やはり浅そうだったが、老老介護のひなびた家の仕事にしては厭な顔を少しもみせなかった。

それがかえって不安だった。

別に家の財産目当てなのではとか、派遣報酬以外の表にでない見返りを求めていそうだとかの下ごころを懸念しているのではない。

心配なのは夫が昔から浮気性で、特にこのような容貌の娘が好みであった、ということだった。

今更、あのような状態になった夫に何ができるといふわけでもなかったが、それでも時間帯の調節に三人目のヘルパーが必要になってはじめてこの娘がやってきたときから、ノキには茂市がなんとなく美智子を心待ちにしている様子がうかがえたのだった。

気ぜわしく何度も壁の時計を見ては来訪退出時間を気にする。特別必要でもないのに口を大きく開く。鼻腔に力を入れ彼女の香りをとりこもうと深く息を吸う。幼子が要求するように表情がもどかしく変化する。

さらに、痩せほそった手でいかに自然にみえるよう、どうにかして身体に触ろうとする。

少し触れると明らかに口元がゆるむ。

嫉妬というわけでもない。むしろ夫が元気になつてくれればありがたい、というぐらゐの気持ちではあった。ただ、同じ女としての胸騒ぎがこのところ収まらない。孫と祖母

っており、逃げないよう管理しようとしても、すぐ側に近づくまで動かない。

鳥たちを追って崖下を花伝いに歩くと、カニやフナ虫たちが海岸にうちあげられた雑多なゴミの間を蠢いている。

時々思い出したように色鮮やかな小石やガラスの欠片を拾う。

ビンの底が海に削られ丸くなった緑色の破片を親指と人差し指ではさみ太陽を透かしてみると、陽光が環状に広がりそれぞれの端の形状に応じてまた小さな輪が見える。

化粧石鹸に似た光沢のある肌色の小石を杖の先で砕き餌のようにまくと、鳥たちが近づいてくる。

海は穏やかである。七月までは多少荒れる日があつても老夫婦にとつてはたかがしれた時化だった。もう何十年となくここに住み着いて、それこそ生きるか死ぬかの修羅場をくぐってきたのだ。二度、家が半壊したことがあつた。

それでもこの浜を動かなかった。

盆が近づいてくる頃から海は狂いだす。

堤防を乗り越えて覆い被さる大波は家をまるごと呑みこみ海の底へ引き込もうとする。分散した波はすでにしびきとよべるものではなく、それぞれが水の塊となって叩き寄せる。渦巻状に身もだえした風が左右から吹き上げる。

二人でロープと突っかい棒を駆使し何度家を補強し、支え、あるいはもう観念して命からがら崖の上へ逃げたか。

ぐらゐ年の差があるのに、女という部分で対抗しようという衝動がかすかに自分の中で蠢いているのに驚いた。なんということもないのだが、美智子の方が厭そうな様子を見せないのが気になったのだ。

生来の性格なのだろうか。特にこの家に財産があるわけでもない。世間に誇れるものがあるわけでもない。

ヘルパーとしての自覚なのか。それにしても淡々と事務的に仕事をこなしてくれる他の二人のベテランヘルパーと比べると屈託がなさすぎる。根っからの天真爛漫さ、とでもいうのか。

勿論、茂市がそんな娘に身体を触られるのを嫌うはずもない。

彼女の来訪をひときり心待ちにするようになったのも、わかる。しかし、美智子にしてみれば排泄の処理もする寝たきりの老人なのだ。

契約の二時間の間、美智子は食事の支度と掃除をして、夫の身体を拭く。最初は立ち会っていたが、美智子が慣れ、介護される夫もとりたてて妙な素振りをみせないのがわかると、ノキはその間別の仕事をして、夫と若い娘が一つ部屋で過ごす時間をやりすごしていた。

浜に放したニワトリたちに餌をやり、小屋を掃除する。杖の助けがなければ遠くの浜までいけない。鳥たちもこのところ横着になっていて、ノキがはやく動けないことを知

崖さえも突風とともに足元をすくおうとして絡みつき、転落させようとする。

この、今目前に拡がるたおやかな淑女の海は、台風がくると予想もできない修羅の表情となる。浜を削り崖を打ち砕き破壊の叫びに狂奔する。

それがまた好きなのだ、いつか茂市が海を見て言ったことがある。漁からかえった直後で、頭にねじり鉢巻をして筋肉ではじけそうな腕を組み、遠い目をして呟いたのだ。

ノキもまだ若く、夕日が夫の精悍な横顔の陰影を濃くし、肩に漁で受けた引き網の傷口を赤くにじませているのを見て今夜は抱かれないと、腰のあたりが締め付けられるほど欲情したのを覚えていた。

「俺はこの、こん海がすきじゃ」

たった一言だったが、その一言に夫婦が近隣浦々の集落から離れて崖下の海辺の家に単独で暮らす理由が凝縮されていた。

浦の者たちからは当初「変わり者夫婦」とことあるごとに呼ばれたが、夜昼なく働き、人に蔑まれまい、後ろ指をさされまいと、とにかく人並みに生きようとする夫婦の姿に、いつしかそう呼んでいた者たちは口をつぐんだ。それは挑戦的な生き様でもあった。

茂市は何度か溺れかかった子供を助けたことがあり、また生き死には別にして、何人も浦での行方不明者を発見し

た。だが、生来の頑固さと人付き合ひの悪さは変わらず、ノキの苦勞であった。どんな譽め言葉も素直に受け止めなかった。こうして寝たきりになるまで減多に他人を信用しなかった。豊漁を祈る恵比寿祭りで酔って網本を殴り倒したこともあった。いざという時頼られる存在でもあったが、日頃は疎まれ疎外されていたのだった。

海だけが茂市を裏切らなかつた。

辛いこともあった。

二人の間には祝言をあげて間もなく男の子が生まれたが、首が座る前に急逝したのだった。

ある夕方、ノキはほんのひと時編み籠の中で眠る息子を縁側に放置していた。それこそ竈の火加減を見に行つた一瞬だった。ノキが戻つて見ると、籠だけで赤子の姿がない。家の周囲にもいない。頭の中が真っ白になった。

「太一、太一！」

浜に飛び出し息子の名を呼びながら駆け回ると、浜の奥に着ぐるみと血の跡だけが残されていた。気が狂つたように泣き叫びながら、崖下から海の中まで走り回つたがみつからない。

周囲に犬の足跡があり、二人は浦の者たちの手も借りて懸命に子供を探した。野犬の寄り集まりそうな場所から、漁師連を呼んで近辺の海の中まで調べたが、とうとう発見することができなかった。情況から考えて、野犬に襲われ

場に黒い人影が見える。

この陽気の中、灰色の帽子にカーキ色の作業服を着て、なにやら四角い金属製の棒を抱えている。釣り人にしては釣り道具らしいものが見えない。杖で近づいてゆくには距離がありすぎるので、ノキはそこに立つたまま暫くじっと見ていた。

人影は片手を口元にあて、何か言つたようだったが、やや耳の遠くなつたノキには聞こえず、それを示すため耳を大げさに相手の方向に向けた。

人影はすぐに諦めたらしく、手をだらりとおろすとそのまま背中を向けて岩場の向こうへ隠れてしまつた。おほつかない足取りに地元の間人ではないと思つた。

今時分こんなところで何をしているのだろう、と考えたが、時折物好きな釣り人や気まぐれなヒッチハイカーなどが、隣の岬伝いに歩いてくることがあったので、それ以上気にとめなかつた。そういう人間たちは別に悪さをするわけでもなかつたが、大半はあ的那天の天狗岩の手前で引き上げてしまう。岩の手前は結構荒れた磯が拡がり、それなりに濡れる覚悟がなければこちら側の浜に入つてこられないからだ。

つまり、夫婦の家は崖と海に囲まれた閉鎖的な空間の中にあり、地域上でも孤立していた。

振り返ると、海水に浸食され下地が海へ流出し齒槽膿

どこか他の場所へつれさられたとしか考えられなかつた。浦々の者は誰も夫婦の悲嘆に悔やみの言葉もかけられなかつた。野犬はそのころ確かに多く出没していて、猪やタヌキなどの農作物の害獣以上に浦の厄介者になっていたため、駆除の話が出ていた矢先だった。

ノキは一時海に身を投じてしまいたくなるほど立ち直れなかつた。

死んだ子のことを思い、宵の口にふらふらと波打ち際を歩き、いつまでも海岸線をさ迷い、とつぷりと日も暮れて探してきた茂市から平手打ちをくい、我にかへつた。家に帰つても飯もつくらずいつまでも泣き続けた。

そういうことが何度か繰り返された後に、やつと自分を取り戻すことができたのだった。夫も辛かつたに違いないのに、全ては夫自身の強さと愛情のおかげで立ち直れたのだった。

それ以後、子供には恵まれなかつた。子供がいれば、ここに住んではいなかつたかもしれない、と今も思う。

指先で赤子の肌のようなすべすべした貝殻をさすりながら、子供がいれば随分違う人生になっていたかもしれない、と思う。いまでも亡くなつた子を思うだけで涙がにじみ出る。いったん親になつたら、生みおとした我が子との絆は互いが死ぬまで消えはしないのだ。

誰かが呼ぶ声がした。顔を上げ見回すと天狗岩の先の磯

漏の齒グキ状態に底が空洞になつたコンクリートの防波堤と、潮風にもまれた雑草だらけの褐色の土手の上にひなびた我が家のつかつている。家自体が呆然と海を眺める黒黴にまみれたしゃれこうべのようだった。

既にあの家は死んでいるのかもしれない。あたしら夫婦は死んだ家に住みつく亡霊か。

そう考えると可笑しくなり、思わず笑みが漏れた。

あの若いヘルパーは亡霊の家に誘ひ込まれた犠牲者なのかもしれない。

なんとなくその考えにひきずられながら家に戻ると、美智子は既に仕事を終え、帰り支度をしていた。

鼻をくすぐる炊き立ての飯と吸い物の匂いが漂つてくる。

「おや、もう帰るんかえ」

ノキがいかに名残惜しそうにいうと、一瞬返事をためらうように見えた。

「ええ、食事のしたくはできてますし、茂市さんの着替えもおわかりましたから。次の利用者の方が待っているのだから……」とノキの視線をそらしながら言う。

言葉に違和感があり、それとなく顔色をうかがうと、かすかに頬が赤らんでいる。ははあ、これはなにかあつたかもしれないと震える杖先で身体をささえながら、そそくさと帰り支度をする美智子の横顔をさらに追うと、ややあつ

て笑顔でノキを見て「どうかしたんですか？」といつもの調子で言う口元の八重歯が白かった。

「いや」となんとなしに低い声で語尾を濁しながらとりつくろうように炊事場の棚からつくり置きしておいたヨモギモチを一皿取り出し「よかつたらもってかえらんね。ごくろうさん」

ヘルパーはモチとノキを交互に見て「すいません。ありがとうございます」と言った後気の毒そうに「でも、私たちはこういうものはいただけなことになっていきますので」

そういうもののだとは知っていたがあえて「まあ、そういうわんで。どうせ食べきれんのじゃけん、もってかえりよ」と無視して新聞紙に包む。

何度かそういうやりとりがあつて、美智子がとうとう根負けし、恐縮して何度も頭を下げながら崖を登っていく後姿をみながらノキの勘ぐりは深まった。

やはりおかしい。土産をもらったとはいえ、何かうしろめたそうに見える。

茂市の寝ている部屋へ戻ると、既に夫は熟睡している。

浴衣も蒲団のシーツも清潔なものに替えられ、いつになく心地よく氣をいれて眠りこんでいる。部屋の天井の隅に祀られている神棚に視線をやると、そこに差し込んだままの黄ばんだ御幣の先が揺れていた。

やや高めに盛上げた枕の角度から下目使いに、非難めいた表情でノキを責めているようだ。

股間から手をはなした。

言葉を発せられない夫はただ妻の顔を凝視している。だが、死んだと思えるほど熟睡していた夫が知らないうちに目覚めていたときの、いつもの雰囲気と違う。

その目を見てノキは氣付いた。

何年前には反応していたものが、いつしか老いの茂みの中で排尿するだけの栓になりはてしてしまったことに、さしたる寂しさも感じなくなっていた。

自分も老いたということなのだろう。

今夫の瞳に活力が戻っていた。不安げに歪んだ薄い眉の下で剥かれた目の奥で、感情の焔がゆらめいている。ノキは瞳の呪縛にかかり目をそらせずにいた。このまま夫が体を起こし、自分を殴りつけるのではないかという幻想が脳裏に浮かんだ。

すると茂市の表情の中に急にうしろめたさの陰が紛れ込んだ。目の下の肉が僅かに上がり口の両端が緩んだ。噴出したかけた熱湯の温度がいきなり冷えた。そのかすかな変化をノキは見逃さなかった。

ノキは性を弄んでいたことの非難よりも後者の感情のゆらぎに関心をもった。経験が老婆の直感を刺し貫いた。

あの、若いヘルパーと何かあったのだ。

どこからか風が吹き込み、潮の匂いに崖肌にはびこる湿った苔の香りが混じりこんでいる。

ノキの中に年甲斐もなく小さな嫉妬心が湧き起っている。

荒神様よ、あんたは何か見たか？

見上げる神棚は勿論応えなかったが、夫の寝所のシーツや枕もとのタオルやきちんと積み重ねられた食器をみるとヘルパーへの感謝の心も生じた。

夫の顔を覗き込みすっかり寝込んでいることを確かめると、足元の蒲団をそっとめくった。痩せ細った剥き出しの足の付け根を覆うオムツの白さが目にまぶしかった。

大人のは余裕をもたせて大きめに腰を覆うため昔の女学生の提灯ブルマーに似ているが、汚物のはみ出し防止のために太腿に漏れ防止のギャザーがついているので、やや珍妙に見える。

ノキは氣付かないよう、そっと股間のふくらみに手をあてた。

あたしのもんだ、こは。あたしのもんだったんだ、こは。

感情が昂ぶりさらに強く押すと、芯のある弾力が掌にかえつてきて反射的に指を萎縮させた。

はっと氣付くと熟睡していたはずの夫が見つめている。目は敵にやられた瀕死の爬虫類のように鈍く警戒してい

夫の男性が、あの若い娘に反応したのかもしれないと考えたら、オキ火のようにくすぶって消えかかっていた女の嫉妬心が、再び燃え上がり、堆積していた老いの灰を巻き上げた。

ノキは執念深い女ではなかったが、ただ、全身全霊をささげ人生をかけ、懸命に強かった夫を愛し貫いてきた自分の中に潜む女の修羅を久々に感じたのだった。

3

盆が近づいてくると提灯を出す習慣が長年身についていた。時化の風の先達が沖でざわめき始めた頃、黒檀でしつらえた提灯を仏壇の前に置き、灯りをとますと、二十年以上も前に入れた隅切角木瓜の家紋がぼんやりとうつしだされる。

絹張りのため灯りは十字形に分散し、それが色あせた家紋に眉をひそめ口を引き結んだ泣き顔に似た表情を与える。

提灯の灯りは以前火事になりかけて電球を使っているが、それでも仏壇だけは蠟燭を使う。海風がかわると線香の煙のなびきもかわる。

家の隙間風は潮の香りとともに季節の変遷も知らせてくれる。そろそろ時化の時期が近いと囁く。

仏壇の位牌の後ろにそつと置かれた遺影は既に黄ばんで輪郭もぼやけている。生まれてすぐに亡くなった子の遺影は笑顔もそれとわかりにくくなっている。

この子が生きていれば人生がかわっていたかもしれない。おそらくこの海辺に居をかまえてはいなかっただろう。

仏壇に向かい数珠を両手の平ではさみこむと蠟燭の灯りにノキの横顔が半分闇に隠れた。

奥の間で茂市がせきこむ声がある。まだ、生きている証なのだが、急を要する声かどうかは、わかる。

潮騒のざわめきを押し殺した深い宵闇がひそかに家を包み込み、やがて鳥小屋の主たちのつぶやきが聞こえるようになる。生活の歯車が止まり、眼前に過去の思い出がよみがえってくる。

なぜ、ここを、この場所を動かなかったのか。人手が必要な時や事故や災害に直面した時、近隣浦々の人々の助けを得やすい場所にどうして移住しなかったのか。それは茂市が、この海辺の、この場所が好きだったからだ。

この浜が好きだ、と確かに言っていた。祝言をあげる前から口癖のように無意識に繰り返していたが、なんとなく聞き流していた言葉が、かなり重大な意味だったのだと後で知ることになった。頑固で人嫌いだけならまだしも、常

手前は闇だが、遠くがかすかに青白いのは太陽がまだ沈みきれしていないせいだろうか。

風の吹く方向が一定していない。

だが、涼しい。

月を見上げると天空の少し離れた場所に大きな星が一つだけ瞬いている。

その星を見ながら、人はどこからきて、どこへ行くのか、と思う。何のために生まれてきたのか、と首をかしげる。

あの人に置いていかれないように懸命にはしってきた。わき目もふらず、生きる意味などあまり考えたこともなかった。ただ日々の生活に追われ、夫との絆を信じあの家を守ってきた。

そうしてふと立ち止まり周囲を見回し我が身を鏡に映すと、時間は摩耗し、肉体は無慈悲に老いていた。とりかえせない時間。削り込んだ若さはどこに捨ててきたのか。

月明りの下を海岸沿いに歩く。

波は穏やかだが、風がざわめいている。右手の崖は巨大な屏風のように闇の中にそびえている。闇の舞台の暗幕。

浜は平場の舞台で、海が観客席だ。

退屈で長い上演。終演はいつか、出演者にもわからない。

客の姿はないが、誰かの視線を感じた。立ち止まり振り返ると、ノキの足跡が黒い破線となって波打ち際に続いて

に身近に潮騒と海の香りがし、湾曲した浜と朝日の見える水平線が眼前に広がっていないと落ち着かず、逆に閉鎖された空間にいると禁断症状のように喉元を押さええ空気を求め、あげくの果てはわけもなく粗暴になり誰彼かまわず殴りかかった。

一種の心の病である。

若いとき一度だけ他県の山中の大きな旅館に泊まったことがあった。部屋の広さも内装も常人には申し分なく、仲居の接客も露天風呂も料理も見事に顧客サービスの行き届いた旅館だったが、茂市は入館した時からいらつき悪態をばき、とうとう一睡もせず他の連れの客たちのことなどは無視して一夜飲みあかし泥酔して暴れ警察沙汰になり、ノキをひっぱって二人だけで早々に引きあげたことがあった。

しかし、半農半漁で生活をたてている浦々の者たちのなかで変わり者の茂市はうとましい存在ではあったが、漁の腕はもとより、行政や浦々にのりこんだ開発会社との交渉の場では、その当意即妙の発言力と恫喝で地元の言い分を通すことで一目置かれる存在でもあった。

その男が今、あのように何も喋れず他人の力をかりなければ排泄の処理もできない姿で仰臥している。

数珠を握り締めて外へ出ると、漆黒の中で波がざわめく海の上に冴えた三日月が出ていた。水平線をかじるように漁火がぼつぼつ点在している。

いる。

そこに違和感があった。

違う。あれは自分の足跡ではない。まず、そんなに歩幅が狭くはない、というより歩数が多すぎる。波にさらわれたのなら、むしろ減るはずだ。それに杖をついているのにその一定した痕跡がない。

そこまで考えてつま先に視線をおとすと、確かに足跡はノキの足につながっている。

いや、まで。

すぐそこ。おそろおそろる目をこらし足跡を逆に追うと十メートルほど手前で二手に分かれている。自分の足跡が途中で割れているのだ。

そこから先、自分の足元まで続くものは歩幅も杖の差し跡も確かに自分のものだ。

だが、別れて崖の方向、ノキの左手に向かう足跡は別物だ。

ノキは異質な足跡の続く先、おそらく自分と平行の位置に立っている左手にいるものが何なのか、見ることができない。

背中と杖の握りこぶしにじわりと汗が染み出し、いざという時この杖がどれくらい役にたつだろうかという思いを脳裏に巡らせた。

しばらくそのまま硬直していたが、次第に足腰が痛くな

り同じ姿勢でいることに耐え難くなってくる。動きの気配はない。だが、たしかに何者かがこちらの様子を伺っている。かすかな息遣い、体温がノキの肌に届く。

生唾を飲み込むと、思い切つてきしむ首を曲げ、目の端で崖の方向を盗み見た。

黒い影がうずくまっている。

胸の鼓動が心臓麻痺を回避できる程おさまるのを待ち、杖を決して離すまいと力を込め、さらに目を凝らすと、瘦せた黒い犬が舌を垂らしているのだった。

相手もノキを値踏みするように底光りする眼でなめまわしている。完全な黒ではないが、月明かりに伸びる崖の影の中にいるせいで真に黒く見えるのだった。

どうやら、ノキの背後を音もなくつけていたらしい。

いくらか耳も遠くなつたとはいえ、今の今まで気が付かなかったとは、どうしたことか。五感がそこまで衰えていたことに愕然としたが、すぐに諦めと事実の受け入れを認める心境になつた。

年をとつたのだ。

犬は耳を垂れ、走つてきたばかりのように舌を出し小刻みに呼吸している。何か、ノキを非難するような上目づかい。

正体がわかつたせいで幾分心構えができたノキだったが、星月夜とはいえ、この浜辺では禁断ともいえる犬の出

現に恐怖は拭えなかつた。もう長い間、浜で見かけたことがない。

急に今ここで自分の足跡から湧き出るように姿をあらわすとは、何かの示唆か。

どうするべきか。

声を出したところで助けなどこない。浜辺を散策中に倒れば倒れたでそのまま逝つてもかまわない、などと頭はどこかで思つてはいたが、こういう形でいざ身体の危機を迎えると、閉鎖された空間で助けの声が届かない事は予想外に恐ろしかった。

突然垂れていた犬の耳がはねあがり、本体もすつくと立つた。目はノキを見ていない。

ノキは自分には聞こえない音を聞いたのだと直感し、用心深く犬が見ているのと同じ方向に視線を滑らせた。

先日の昼間人影がいた方向、天狗岩の磯のあたりにどうやら何かいるらしい。犬の視線は岩場に集中している。

ひとつ、ふたつ、みつ、心を落ち着かせるために頭の中で数をかぞえながらじわじわとあとずさりする。

瘦せているとはいえ、この暗闇に大きな犬。どこから浜へ降りてきたのかしらないが、ノキから注意がそれている間に距離をおいたほうがよさそうだ。

五、六歩ほど後退した時、天狗岩の下から小さな影が飛び出し崖に向かった。同時に硬直していた犬が弾かれたよ

うに走り出し、影を追う。

二つの影が崖下のさらに濃い闇の中に消えた。二匹の動物がせめぎあう唸り声と、岩肌をがりがりと削る音が間をあげずノキの耳に届いた。

イタチか、タヌキか。

時々家の裏畑や鳥小屋を荒らしにくるが、磯にひそんでいたとは珍しい。このようなことはノキの記憶にもあまりない。暗闇の中で気配がするだけで、老いたノキの目には皆目様子がわからない。

しばらくあとずさつた後、体の向きをかえ、できる限りの速さで家へ急いだ。途中何度も振り返つたが、何も追つてくる様子はない。砂地がいつもより粘っこく足に絡みつく。

息をきらしながら家の引き戸にやつと手をかけた。ほつとしたと同時に別の展開がみえ、再び動悸がはやくなつた。

考えてみれば僅かな時間とはいえ、自分が外に出ている間身動きできない夫は一人きりだったのだ。もし、飢えた犬が侵入してきたら何も抵抗できないまま噛み殺されてしまふに違いない。

そう思うと胸の奥から突き上げるような不安がせりあがり、あわててカギをかけると、茂市が無事かどうかおそるおそる敷居をまたいだ。

ノキの姿を見ると夫はさがるような視線を妻にあびせ、吃音を発した。特に変わった様子はないが、排便したらしい。

安堵がどつと押寄せ、枕もとの手ぬぐいで自分の額と首筋にじむ汗を拭うと茂市はやや怪訝な表情をした。

オムツを取り出し、夫の下半身を露出させながら、これからはうかつに夫を一人きりにはさせまい、と心に誓つた。

すると天狗岩の方角から遠吠えが聞こえびくりとして耳を澄ますと、崖の上からも別の声が呼応した。獲物を仕留めた報告か、それとも召集の合図か。ぞつとしたノキはもう一度閉じまりに漏れはないか家の中を見回した。

4

浜に朝もやがかかるのは珍しかった。かかつて、潮の流れがかわる午前九時ごろまで濃い湿気を含んだ煙霧がいつまでも漂うことは滅多になかつた。曇り空にぼんやりした太陽が見え隠れしている。

崖のつづら道を二人のジャンパー姿が降りてくる。パラスをとりながら難儀そうに岩場を下る様子をみながら、先日の福祉センターからの連絡を思い出す。

美智子がこの介護訪問ができなくなつたという。事務員からの連絡だったので、本人の意向は皆目わからなかつ

き入れた。

男たちは市の福祉事務所の人間で、つまり茂市を市内の老人介護施設へ移転させないかという、相談であった。

「はあ」とノキは正座したまま背後の座敷に臥せっている茂市を肩越しに見た。市の職員たちも落ち着かない様子で奥座敷を気にしている。茂市は目を閉じている。起きているのかどうかわからないが、起きているなら耳だけはいはずだから聞こえているにちがいないかった。

男たちはひとしきり入居費や介護保険の適用について説明し、ノキの返事を待った。

ノキは前かがみに提出された資料を目をしばたかせながら、みるともなしにみていたが、やがて顔をあげ「うちは、かまわんけど本人がうんとは、いわんでしようなあ」職員たちは奥座敷をちらとみて「ご本人も施設に入られたほうが楽だとおもいますが、奥さんも大変でしょう」と言い、再びノキの返事を待ったが、相手が前かがみのままなかなか返答がないものだからやがて「失礼ですが、茂市さんはお言葉のほうは」と遠慮気味に問う。

「ああ」とノキは心ここにあらずという風からやっと視線をあげ「あの人の気持ちはわかりますよ。あの人はここが好きなんです。ああなっても、今でもここが好きなんですよ」

「ご本人がそうおっしゃったんですか？」と語気がやや荒

た。実は夫と何かあったのではないかとノキが疑った日のあと、美智子が体調をこわしたので替わりのヘルパーが来ると連絡があり、それからずっと彼女の顔をみていなかった。そのことを告げたとき夫は明らかに落胆した様子をみせた。

電話を受けて、はて、やはり何かあったかなどとかんぐりながら、夫に「美智子さん、都合でもうこれないそうですよ。来週からかわりの人が来るそうです」と事務的に伝える唇で何か言おうとした。頬に赤みがさし、畳の上に投げ出した手を駄々をこねるように叩いた。

ノキは夫の口元に耳を寄せ「はあ？　なんですか」とわざと乾いた口調で聞いた。

すると茂市は観念したように目を閉じたのだった。まるで、ノキの言葉に「私は何でも知っているんですよ」という意味をよみとったかのようなだった。閉じた瞼に無念の涙らしい潤いが見えた。

男たちは家の前に立つ老婆の姿に気付くと少しばかり会釈をし、それから目立たないようにノキと家を交互に見比べた。珍しそうに、波をうつ屋根から扉が傾いた鶏小屋へと視線を移し、それから再びノキを見て、やや憂鬱そうな顔で近づいてきた。連絡をうけていたノキは二人を家へ招

くなる。ここにきて、とにかく施設にいたいという意志が強いのだとわかった。

はて、なぜ今ごろになって、と思う。

茂市がこういう状態である事は、市でもとつくに知っているはずだ。ヘルパーの派遣のときはなかなか手配をしてくれなかったのに、今ごろになって設備の整った介護施設へほとんどただみたいな条件で入所させてくれるという。

どうにも合点がいかない。

ノキが再び呆けたように黙り込み一言も発しなくなったので、上司らしい白髪頭の方がついに言った。

「実は、このあたりの海岸線は県の観光開発事業の計画に組み込まれていました」と切り出した。

「近い将来、この浜に大規模なリゾート施設をつくる計画があります」

市の職員たちはそれからしばらくの間、計画は既に始動していること、立退き料は相場以上の予算を考えていること、移転先も好条件の物件を手配する用意があることなどを、とうとうと説明した。

所詮、朽ちかけた潮吹き家屋に長年住みついた老老介護の古夫婦二人。好条件をもちだせばたやすく了解を得られるぐらいの考えであったらしい。

確かに条件はいい。おそらくここへ来る前に大分下調べ

をしたのだろう。老夫婦の経済状態、親戚関係、評判や生活習慣までも近隣に聞いてまわったのかもしれない。

ノキは無表情に聞いていたが、相手の喋りが途切れた一瞬、肩越しに背後の夫のほうを振り返りながら「どうします？」

茂市はうつすらと目を開きこちらを見ていた。奥座敷の障子から差し込む薄日の中で、ぼんやりした生気が蒲団を覆っているようにみえる。

その茂市が口を開いて何か言おうとした。

顔をあげ、顔が紅潮し、もつれた舌を懸命にくねらせながら蒲団から片手を突き出した。

驚いたノキはそのまま腕の力で這うように両膝を滑らせ茂市の傍らへ移動し、なにか喋ろうと小刻みに震えている唇へ耳を近づけた。

「なんですか？」

舌ではなく喉の奥の声帯から搾り出すような声で茂市は応えた。

「帰らせえ」そうしてふうっと息をつき、たった一言に精魂つきはてたように目を閉じた。額にそっと手をあてるとうつすら汗が滲み熱が引いていくのがわかった。

ノキは手ぬぐいで夫の顔を拭きながら、背中を向けたまま男たちに言った。

「帰ってくださいせえ。こん人がそう、言いよりますけん」

市の職員たちは顔を見合わせ、どう対応すべきか迷っている様子だった。

「どうしてですか？ 条件は悪くないと思うんですがねえ」上司らしい男が眼鏡をずりあげながら粘りつくように言い、若い方は説得材料を探そうと書類に目を落とす。ノキは正座したまま向き直り、今までと違う心に芯のある口調で「こんな人がだめち言うけん、だめですわ。とにかく今日はかえってください」

職員はなおも説得し続けようとしたが、老夫婦が蠟人形のように微動だにしなくなると、互いに次の手を模索するように沈黙が続いた。

「失い本当に息をしているのかどうか」「奥さん、聞いていますか？ 大丈夫ですか？」と腰を浮かしてすりよってきた上司に、ノキは「この辺の崖は満潮が近づいて雨がふるとフナムシで真つ黒になりますけん、はよう帰ったほうがいいですよ。この辺のムシはわらわら足に食いつきますけん」と早口に言う声の語尾に、琵琶法師が琵琶をかきひいたあと之余韻に似た凄みがあった。

さらに背後から差し込む薄暮が老婆の陰影を濃くし表情に凄みを与えた。

上司はゆつくりのけぞり、おびえた様子の部下と顔を見合わせると、一言、二言再訪問を一方的に約束するような台詞だけ残して、退散した。

あの花々の下には死骸が埋まっている。

もう、いつ、何の死骸を埋めたのか覚えていない。しばらく残っていた手のひらの感触さえ記憶にない。

人の死体の上にはどんな花が咲くだろうか。

ノキはふと笑みをもらすため息をつき、家に戻り、背負い紐を手にとって夫の横に座り、顔を覗き込んだ。

茂市はずっと障子の方を見ていた。波の音を聞いているのか、わずかな外の空気を嗅いでいるのか、さだかでない。

美智子がこなくなつてから明らかに元気がない。臉がはれぼったく土色に変色し、いつも唇が乾いて白くひび割れている。肌の色艶も血の気が薄くなり首筋の肉がげっそりと落ちていく。滞留していた生氣が徐々に拡散していくのが手にとるようにわかる。

「久しぶりに、外へ出てみますか」

ノキの皺の中に埋没した小さな黒い目が上下した。

老人は妻へ視線を戻すと少し間をおいて、かすかにうなずいた。

夫の上半身を浮かせ尻と背中に背負い紐をかけ、後ろ向きになり両手を肩の上に乗せる。

前部の留め金をかけ、前のめりになると、たやすく茂市の身体がのった。

以前は生木の束を背負ったような充実した重みがあった

たまに複数の人間が家にやってきて多くを語って帰ると二人きりになった時、いつもそうであるのに静寂がいつそう際立つ。

ノキは箒を手に取り、ひとしきり玄関の上がり口から座敷まで掃き、それから柱時計を見上げた。

もうすぐ昼だが厚くなる雲に外はまだほの暗い。もやもまだかかっているようだ。

雨の匂いがする。

降りそうで降らない曇天が午後まで続き、それが必死に涙をこらえる女の子の心の心のように、空を見上げるノキは幼いおかつば頭の自分を思い出していた。

人は枯れてゆく。

若木のまま天折する人間もいれば、老いさらばえても瘦せた枝葉を懸命に伸ばし生にすがりつく人間もいる。

人の晩年を考えると、その者の辿ってきた人生の価値に比例して美しく老いることはできないものだろうか。

私たち夫婦の生き様はこの海辺の家に凝縮されている。今更ここを移動することなどできようか。

崖沿いに花々が咲き乱れ、あるいは残骸を残している。

カンナ、菊、ペゴニア、ラベンダー、時期が過ぎて黒ずんだアジサイや、干からびたアロエがセイタカアワダチソウなどの雑草と混在している。色使いの荒い画家の絵のようだ。

が、今は乾燥しきつた小枝のように軽い。

驚くほど軽いので、ノキ自身の足腰に思つたほど負担がかららない。茂市はなんとか動く腕を妻の首筋にまわし自らの体がずり落ちるのを防いでいる。車椅子はあるが納屋で埃をかぶっていた。砂浜を押しして行くのはかえって面倒だからだ。

ノキに余力があり、茂市の体調がいいときに時折こうして浜を散歩していた。

出歩くのは一年ぶりぐらいだろうか。

杖をつきながら浜に出る。曇り空だが、すぐに降るといふわけでもなさそうだ。

耳元に夫の息がかかり、くすぐつたい。

「はい？」

何か囁きかけようとしているのか、唇が動いている。だが、聞こえない。あるいはただいつもの癖でもぐもぐと動かしているだけなのか。

海は砂の色と天候のせいで手前から沖へつれ徐々に白から濃紺へ、そして銀色へと変化している。船影が二、三見えるが、遠すぎて進行しているのかどうかさえわからない。

湿気を含んだ海風がノキのまばらな白髪を撫でるが、顔に感じる程波は荒れていない。

老婆は砂浜へ踏み出した。湿地と乾燥地帯のちょうど境



近藤勲公

こんどう のりひろ

1958 大分県津久見市生まれ
1992,1997,2000 九州芸術祭文学賞 大分県地区代表
「日田文学」同人
JA 大分県合併事務局勤務

しようと思えばできたはずだ。夫のせいばかりではない、何か理由があって自分はこの場所を動かなかったのだ。じつと崖下の日陰にたたくみ忘却の原因をたぐりよせようと思案をはじめると、背中の茂市がぶるっと震えた。



挿画／横田公望

目あたりを踏みしめながらしばらく歩き振り向くと、崖下の家が二人を見つめている。
老いた家。潮風と波しぶきにもまれ、黒く変色し、しなり、今にも朽ち果てようとしている。
あの家だけがずっと私たちを見ていた。
ノキは時折砂地に深く杖をさしこみ体を支えながら夫を抱えあげ、左手に海、右手に花のラインを見て、一歩一歩足元の感触を確かめながら進んだ。
夫の細い呼吸を背中を感じる。天狗岩の磯のあたりで碎けた波の飛沫が潮風にのり、かすかに頬に届く。
しばらく歩くと崖下に小さな黒い塊が横たわっていた。ちよんどう一日中日陰になる部分で、遠くではよくわからなかったが、近づくといタチか何か動物の死骸であった。食いちぎられて死んでいるようで、すでに腐敗臭が漂っている。死んでから数日たっている。
ははあ、とノキは合点した。
これは、あの晩黒犬が追っついていた獲物に違いない。磯から飛び出し注意をひいたのだ。おとなしくしていればこんな目にあわずにすんだかもしれないのに。
無残な死に様だが、これのおかげで無事に家に帰れたのだ。
ノキはもう一度夫をよいしょともちあげ、抱え紐を締め上げると、杖を握っていない方の手で死骸を拜んだ。

それから傍の崖下に杖で浅い穴を掘ると、死骸を先端でころがし、埋めた。死骸は皮がはげ、あちこち残骸を残していたが、ノキははいねいに拾い集めた。
そこはちよんどう花のラインが途切れている部分で、今度この救い主の墓の上に蒔く種をもってこなければ、と思っただ。
そうして手前まで途切れることなく続くラインを見て、ふと自分は必ず死骸の上に花の種を蒔いているのだと、今更ながら気付いた。
あの花のラインの下には何か隙間なく埋もれているのだ。
ノキは過去自分が埋葬した死骸たちを思い出そうとしたが、それらの細部が記憶から削り取られたように欠落していることに驚いた。
記憶の埋葬。それらの色も形も大きさも感触もなにもかも脳裏に浮かんでこない。ただ無数の死骸を埋めたという鮮明な確信だけがはつきり残っている。
一体何が埋もれているのか、思い出せない。いつから思い出せなくなったのか。なぜ思い出せなくなったのか。突然理由もなく思考が連鎖し新たな疑問が浮かぶ。
なぜ、自分はこの海辺から出ていこうとしなかったのか。
考えてみれば、夫が身動きできなくなってからは、そう

日田文学

五十三号

日田文学

大分県

厳しい研鑽の場として

「日田文学」は、昭和二十九年に、昭和三十三年度上半期芥川賞候補作「銀杏物語」の作者・岡田徳次郎（日田市役所職員）や「九州文学」同人の松尾末松などにより創刊された。

昭和三十三年三月に第四号を発刊した岡田は上阪した。岡田が日田を去った後、「日田文学」は久恒隆弘（日田市役所職員）を中心に引き継がれた。その当時の動静については詳細は不明だが、同人の大半が離散し、ほとんど久恒一人で支えていた。

昭和六十三年に二十七号を発刊し五年間の休刊となった。久恒のことばでは「日田文学の冬の時代」であり、日田の地での同人誌発刊の継続の難しい時代でもあった。

五年間の休刊後、平成五年一月二十八号（復刊一号）を編集・江川義人（詩誌「アルメの会」同人）・発行人を久恒隆弘として「日田文学」は復刊した。

この時の呼び掛けに賛同した同人は九名で、作家の河津武俊（「詩と真実」同人）、詩人の江川英親（「アルメの会」同人）、新聞記者の竹原元凱などであった。そして十五年

の歳月が過ぎていった。

この十五年間、多くの同人の集散離合があったが、とにかく「文学同人誌」としての力量を凌駕することを厳しく目指し、年間二回発行を堅守してきた。その間同人の高齢化の波に晒され継続の危機に直面したこともあったが、その危機を回避し、今年四月で五十六号（復刊二十九号）を発刊するに至った。

三十号（復刊三号）の稗田紳太郎の小説が「文学界」の全国同人誌評に初めて取り上げられた時は何ともいえない感激であった。その後発刊する度に誰かの作品が「文学界」や新聞文化欄の書評に取り上げられるようになり、取り上げられる度に書くことへの情念のボルテージを高揚させていった。

現在までの中で、「文学界」の同人誌評でその月のベスト5には、稗田紳太郎、河津武俊、大石恭平と江川英親の作品が選ばれ、中でも河津はベスト5に五回、そして大石恭平の「夏還る」（三十八号・平成九年八月）と江川英親の「へびと麦畑」（四十二号・平成十一年九月）はその年度半期の優秀候補となった。

また地元の大分放送（OBS）文化振興財団と日田市より、「日田文学」の文化活動を顕彰し表彰を受けた。

昨年、「日田文学」復刊十五周年記念の五十四号（復刊二十七号）で、郷土の先哲「広瀬淡窓」を河津武俊が脚本

広瀬淡窓「咸宜園」の地で

を執筆し「広瀬淡窓特集号」とした際、日田市より「文化活動振興補助金」を戴き、広瀬家十一代・県知事や市長の寄稿を掲載した。

このような「日田文学」を「文学界」同人誌評で大河内昭爾先生は、「文学同人誌」をして「地方文化誌」への変貌を余儀なくしている場合もあり、それが雑誌文化の成熟なのかどうかはいちがいにはいえないが……と評されている。このことに深く考えさせられた。

同人の中には小説集や詩集を上梓している者もいる。小説集では、河津武俊、大石恭平、相加八重がいるし、詩集では江川英親、中島緑、江川義人がいるが、中でも河津の「富貴寺悲愁」は『ふるさと文学館第五巻・大分編』（ぎょうせい版）に収録され、「肥後細川藩幕末秘聞」（講談社）は熊本県立劇場で上演された。

また江川英親の詩は『現代詩手帖』に再三収録された。江川義人は『季刊文科』二号（紀伊国屋書店）にエッセイ「地方」と「同人誌」を執筆した。

昨年九月の「第三回富士正晴全国同人誌賞」（徳島県三好市／選考委員・津本陽氏ほか）では、「日田文学」



「日田文学」同人合評会で

は、応募総数百五十九誌の中から大賞候補十一誌に選ばれた。

表紙絵の日本画家・斉藤和は「一九九九年京都文化博物館主催京都美術工芸展」で題「傍らに」で大賞を受賞し（京都博物館所蔵）、「全国水墨画公募展2008」（広島県呉市）では金賞を受賞した。同人の日本画家伊藤忠雄は「第十九回上野の森美術館・日本の自然を描く展」で題「南阿蘇長陽村」で美ヶ原高原美術館賞を受賞した。

同人は現在三十人で、日田市出身が大半であるが、大分市・福岡市・津久見市・中津市そして京都市からと広範囲に広がる。

近藤勲公は、一昨年の五十三号からの参加で、「海辺の家」は「日田文学」最初の作品である。

人口約七万余人の緑の稜線に囲まれた小地方の「文学同人誌」として、互いの作品を砥石として研鑽し、日田の地から文学の発信をし続けていきたい。（編集人／江川義人）

日田文学

〒877-0041

大分県日田市竹田新町二・一六

☎0973-23-9073

セラピープロジェクト

木戸順子

*

壁もカーテンも、白を基調とした清潔な小部屋だった。一糸まとわぬ姿で横になるように言われると、急に引き返したくなった。十分予想していたことだったが、やはりためらわれて、しばらくその場を動けなかった。高めのベッドは、床に届くほどの大きなビニールでおおわれている。

セラピストはかすかに笑みを浮かべたまま、私を見つめている。決して無遠慮なまなざしではなかった。看護師のような白い衣服の彼女は、その短い袖口から張りのある若々しい二の腕をベッドの方に差し伸べて、無言のまま私を促した。一点のしみもないその美しい肌が、さらに私を臆病にさせた。

体のあらゆる場所に、無数の吹き出物の跡のあるこの体

セラピストは斑点を認めても驚きもせず、最初のあの笑みを浮かべたままである。彼女は仰向けに寝た私の体の、それでも陰部にだけは、小さな白いタオルを静かに置いた。目を閉じると、かすかにゆるやかな音楽が流れていることに初めて気づいた。

「これは、海草をこまかくしたものと海底の泥を混ぜたものでございます。もし、しみるようなことがありましたら、お知らせくださいませ」

抑揚のない、無機質な彼女の声に、かえって救われているような気がする。吹き出物の小さな傷口は、癒えているはずだ。しみることは、多分ないだろう。治ったと思うと、また、あせものような吹き出物があらわれる。その繰り返しだった。突端に小さな水ぶくれを持った、赤い発疹。それが夫とのセックスの後にあらわれると、初めて知った時の衝撃。かゆくて我慢できず、かきむしった後の傷跡。時に、ばい菌が入って膿んでしまうこともあった。理由をつけて夫から遠ざかっていると、徐々に治っていく。拒みようがなくなった翌日、新しく無数の赤い点々を見つけた時の当惑。ベッドでは一度として夢中になったためしはなく、息苦しさと同痛をこらえるのに精一杯だった。快感どころか、その時間が早く終わることだけを考えて過ごした、短い結婚生活だった。

体温より少し高め、そのねっとりした物質が背中、腕、

をさらけ出さねばならない。相当の覚悟をしてきたはずなのだ。ひるむまい。手のひらと顔と足の裏以外はところによつては密集し、ところによつては散在する、大小無数の赤黒いしみの跡のある私の体。この体を少しでも元通りにしたいのではなかったか。果たして効果があるのかどうか、ただそれを信じてこの海辺のリゾートホテルにやって来たのだ。それも、五月の連休のしばらく後のウィークデイをねらつて。

病院のベッドでさえ未体験の全裸となれば、どこかを隠すという事は不可能だった。思い切つて長袖のパンツスーツを剥ぎ取るように脱ぎ捨てると、ベッドに上がった。ビニールが滑りやすく、思わず四つんばいになって体を支えた。斑点だらけの裸体の、この無様な格好をセラピストはどう思っているのだろうか。いつにもまして、気になった。

胸部、腹部と全身に塗り込められていく。ゆつたりとしたセラピストの手の動きが心地よい。一切余分な言葉を発することなく、彼女は丁寧に海泥を私の体に撫で付けていく。人に体を触られることを快だと感じることに体が、奇跡のように思われた。

ぬたつとしたゆるい粘土のような物は、私を包み込み、やがてじんわりと体全体を温め始めた。しばらくすると、ざわざわと風のような音がして、私の全身は糞虫のようにビニールでおおわれた。発疹の跡は完全におおい隠されてしまった。しみることもない。体も心もほのかに温かかった。「しばらくお休みくださいませ。何かありましたら、お声をおかけください。廊下で待機しております」

彼女の声を最後まで聞かないうちに、私はまどろみ始めた。眠ったまま、その裸の姿でふわりと空に浮き上がるに促されて、白亜のリゾートホテルが青い海を見下ろしている。海草色に塗り込められた私の体は風に乗り、宇宙船のようにぶかぶかと大空に漂っていた。ビニールは部屋へ置いてきたようだ。小さな湾は波も静かで、水の色はとこるところに濃い青色の部分を見せている。

宙に浮いているというのに、眠くてたまらない。目をこすると、きらきらと輝く水面に見える小さな三角の形はヨットだろうか。緑の島のようなものは、中央部に丘が連な

る半島の突端だった。途中のくびれた部分に、くねくねと白い道がリゾートホテへ続いている。今朝、バスに乗って来た道に違いなかった。

ホテルの部屋は全部海側に面していて、窓ガラスに反射した光が、時折ちかちかと輝いている。半島の向こう側のホテルとは反対側に鉄道の駅があるはずだが、ここからは見えない。それとおぼしき辺りに、住宅やビルのかたまりがうっすらと眺められた。

さえない物もない初夏の太陽は、ざらざらと私の体にも照りつけ、セラピストがせっかく丁寧に塗ってくれた海泥が乾いてばりばりと音を立てている。体の表面にできたひび割れは次第に多くなり、ばりんとひととき大きな音を立てると、私の体は壊れてしまった。まず右腕が取れて、浮遊している。次に左足。少し曲がった形のままだ。不思議に痛みはない。やがて、右足。最後に、左腕が音もなく私の体からゆっくりと離れた。

それぞれは全く勝手な方向へ移動するというわけでもなく、首だけつながったままの胴体の周りを付かず離れずに動いている。上になったり、下になったり、少し離れたり、向きを変えたり。私の体はこうしてばらばらになってしまった。

私は慌てた。気持ちよくベッドの上にいたのに、どうしてこんなことになっているのか。夫と別れた今は、もうセ「医者に行つて来い」

と言つたとき、二度と抱くことはしなかった。いたわりのおいさえ感じさせない、わけも聞こうとはしない夫の言葉は私を打ちのめした。

しかし、苦痛以外の何ものでもなかったセックスから解放されて、心のどこかでほっとしていた。一方では夜の生活に積極的な夫が、いつまで我慢できるのかと心配にもなった。日がたつにつれて、このまま平穩には済まないかもしれないという不安にさいなまれた。遅い夕食をとっている夫の顔を、盗み見るようになった。別れるという事態には、なりたくない。セックス以外のことでは、夫の言うことは何でも受け入れるようになっていった。そうやって機嫌をとる自分が鼻持ちならなかった。

ぶつぶつとした小さな赤い突起物は、時間とともに平らになり、かさぶたでおおわれた。かゆい感覚がなくなつて黒いしみになった頃、離婚を言い渡された。こういう人だったのだと、日頃から無口な私はさらに話すことをしなくなつていった。

もう愛されることはないのだ。いくら暑い日でも人に発疹を見られるのを恐れ、長袖を身につけて買い物に出かける私の気持ちなど想像すできない人なのだ。

情熱的と言えるほど愛していたわけではなかったが、やっと決心した遅い結婚が一年ほどで破局すると、やはり淋

ックスを強要されなくてもいいと、ほっとしていたのではなかったか。それとも、私の心はこの体のように分離し、壊れ、喘いでいるとでもいうのだろうか。一体、私はどうしたいと思っているのだろうか。自分の体を壊して、何になりたがっているのか。何をしたいのか。どこへ行きたいのか。こんな状態になつてもまだ眠く、やがて考えることも億劫になつてしまった。分解したままの体で空を飛び、いつの間にか大きな雲のかたまりに呑みこまれていった。

*

結婚すると、自己中心的な夫の性格はさらにはっきりしてきた。それは夫婦生活でも同じだった。

常に自分の欲求を満たすことを第一と考える夫が、私の発疹に気づいたのは、結婚して何か月もたってからのことだった。ある夜、手のひらに残るざらりとした感触を大層気味悪がって、部屋を明るくした。そして、とっさにくるまった私の布団を無理やりはぎ取った。

「なんだ。どうしたんだ、これは。お前はその白い肌だけが、取り柄だったのに……」

そう言うてから、夫はしばらく何も言わずに、明るい電灯の下で私の体を点検した。夫の視線が私の体に突き刺さり、私の心を冷たく閉ざした。そして、

しかった。何回となくセックスを拒否した身であれば、承知するより他はない。それに、心のどこかですでに折り合いはつけていた。医者に見せてからはむしろ助かったという思いが強かった。

「残念ながら、ごく稀にこういうことがあります。アレルギーですね。ご主人の精液が全くあなたの体質に合いません。合わないどころか、体が拒否してしまふ。頭痛や吐き気はそのショックなんです。アレルギーが発疹となつて体に出ます。子供でも、食べ物によるアレルギーで皮膚炎のようになることがあるでしょう。まあ、理屈としてはあれと同じですね」

「治るのでしょうか」
「それは、難しいですね。アレルギーなんですからね。長い間に体が慣れるということはあるでしょう。でも、あなたの体は常にショックに耐えなければならぬ。妊娠については、くわしいデータは持っていませんが、普通に考えて可能性は低いと思います」

その医者の言葉を夫に告げるべきだっただろうか。ついに私は何も知らせないまま、夫と別れた。離婚したことを、誰にも話せなかった。友達にでも聞いてもらえれば、いくらか気が楽になったかもしれない。しかし、それは人が集まった時の格好の話題になることは、目に見えていた。世間にはそんな珍しいことがあるんだねえという声の、その

調子まで聞こえてきそうだった。人が納得するような明快な理由があれば、どんなにいいだろう。こういう場合も、性格の不一致という言葉で説明するよりしかたがないのか。実家の両親にも、本当のことを話す気には到底ならなかった。

夫はてきぱきと事の処理をした。私には、夫が会社の仕事を片付けているような感じにしか思えなかった。会社人間としては有能なのだと、今更しようがないことを思った。夫は届けを出し、自分の荷物を整理した。結婚するまで実家の小さな喫茶店を手伝っていた私は、その日から自活の道を探さなければならなかった。高校を卒業して以来、組織の中で働いた経験が全くない。これが何より心細かった。両親に何と説明しようか。

自分から離婚を言い出したのだからと、それでも夫は一年余りを過ごした古いマンションを私に譲ってくれた。

「感謝料というわけでもないが、住むところもなくては困るだろう」

家を出て行く日に、夫はそう言った。自分の特異な体のせいでこうなったという思いもあって、何を言われてもうなずくより他なかった。私の体がたまたまそうだというだけで、私という人間のせいではないのだと言いたくても、黙っていた。あなた以外の人だったら、多分こんなことにはならなかったのにと口先まで出なかった。

*

「終わりましたよ」

セラピストの声で目が覚めた。言われるままにシャワールームで海泥を丁寧に洗い落とす。とろとろと体を滑り落ちていく感じが気持ちよい。ぶつぶつ感は多少あるものの、心なしかつるりとした感触に喜びを覚えた。しかし、斑点は消え去ってはいない。消えているはずはないとわかっていても、気落ちしてしまう。

見たくなくても、鏡に全身が映っている。中肉中背。長所もなければ、とりたてて欠点もない、ごく普通の女の白い裸体。無数の黒ずんだ発疹の跡がなければの話だった。自然に目を背けてしまう。

夫とのセックスがなくなった今、これ以上ひどくなることはないのだ。気長に時間をかければ、もとのような肌にもどるかもしれないと慰めながら、部屋へ戻った。

レストランで夕食を済ませると、何もやることがない。人間社会から隔絶されたようなこの場所こそが、ホテルのセールスポイントなのだ。夜になれば、波の音と風の音、降るような星だけしかない、贅沢な所だった。現代人が仕事や雑事から解放され、心や体の汚れを洗い流す。全ての施設はリラクゼーションのためにだけ用意されていた。

その波の音も風の音も、二重窓にさえぎられると何も聞

「じゃあ」

そう言って夫が出て行くとすぐ、カーテンの隙間からマンションの前の道路を見下ろした。見慣れた夫の車が止まっている。緑色のその車で、結婚前に何度かドライブに行ったことが、もうずいぶん昔のことのように思えた。その頃はどんな話をして、どんなことを考えていたのだろう。すると、助手席に人影が動き、上着の赤い色が花のように揺れた。

すっかり片付いた部屋にもどっても、何もしたくなかった。ほんやりとこれからのことを考える。長い間家のために働いてくれたからと、結婚する時両親がいくらのお金を持たせてくれた。当座の生活に困るという状況ではない。転勤で遠くに住んでいた兄の一家が帰ってくることにあって、急に私の存在は微妙になった。それまでは喫茶店の戦力だったのに、両親はしきりに見合いを勧めるようになった。やつと同居しようとしている兄夫婦にとっても、私は歓迎されない家族だったのかもしれない。知り合いからの見合い話がうまくいって、両親はほっとしていた。三十五歳の娘がずっと居つくことの悩みから解放された喜びがその金額に表れていたと思うのは、穿ち過ぎだろうか。その後、店は兄嫁が取り仕切っていて、繁盛しているらしかった。

こえてはこない。仕方なくビールの栓を抜き、テレビをつけた。結婚したばかりの頃は、一人でいることに慣れなかった。それまでは店の仕事に追われ、時間を持て余すという感覚を知らなかった。夫を会社へ送り出すと、急に一人きりの長い時間が待っていた。暇にまかせて、家事にいそしんだ。窓ガラスを磨き、料理に精を出した。クッションにもランチョンマットにも刺繍をほどこした。確かに新鮮な感動はあったが、それでも夫が帰宅するまでの時間は長かった。しばらくすると、余った時間は自分の好きなように使うことを覚え、初めて気ままに過ごす楽しみを味わうようになった。結婚生活から得た、唯一の収穫だったかもしれない。

だが、ここへは本も、編み物の道具も、絵の具も持ってきてはいない。テレビは丁度、音楽番組の時間だった。一人には広すぎる部屋である。少しポリウムを大きくして、二本目のビールを飲み始めると、画面にコントラバスとその奏者が大写しになった。アナウンサーが、次に放映するシンフォニーの中のコントラバスの役割について説明している。眼鏡をかけた中年の男性奏者は、コントラバスを抱きかかえるようにして演奏の準備に入った。ピンクのシャツがよく似合っている。

「では、その部分をお願いします」

促されて、彼は弾き始めた。低くうなるような音がゆっ

くりと鳴り出した。抑揚のない、ほとんど一本調子の弦の響きは、それでも何故か私の体の中へ中へと分け入ってくる。臓器が打ち震えているような感覚にとらえられて、目が離せなくなった。ずどんと私を押し倒し、びりびりと下腹部を攻め立てる。テンポが速くなり、男にしてはきゃしゃな左手が弦の上をせわしなく行き来している。

コントラバスは、まるで女の体の形そのものだった。男は左手をいっぱい伸ばして女の肩を抱き、体の中心にある弦を上から下へ、下から上へと撫で回している。足は固く女の下肢を挟み込み、時折、顔をゆがめて弓を強く引く。ピンクのシャツはなまめかしく動き、男はついに目を閉じて恍惚そのものの顔つきになった。

コントラバスになりたかった。こんなにやさしく、時に激しく、そして長く抱かれたことが一度もなかった。これもこの体のせいだったかもしれないと、ふいに涙が流れた。コントラバスに言いようのないジェラシーを感じてテレビのスイッチを切ると、残りのビールをぐいと飲み干した。

朝の光に起こされた。ベッドに倒れこんだまま、カーテンも閉めずに寝てしまったらしい。途中で一度も目覚めずぐっすり眠ることができた。それでも朝方、夢を見ていたようだった。どんな夢だったのかははっきりしない。今日は十一時から岩盤浴の予約がしてある。午後のシャトルバス

じていた。男の体も顔も見えてはいないが、声だけははっきりと聞こえていた。

不思議なことに、男は斑点のことは何も言わなかった。真っ暗だったので、見えなかったかもしれない。男の手が静かに私の胸に触れた途端、その手はびくつと動いて私の体から離れた。

「どうしたの。あなたの体には穴があいている。痛くはないの」

男はもう一度、私の胸に手を寄せた。私の首の下に回している左手に力を入れて私を男に引き寄せるようにすると、胸に触っていた男の右手はあつという間に私の背中を突き抜けた。肩甲骨の辺りを手のひらで触っているのがわかった。

「いつの間にかこんな大きな穴があいたのかなあ。血も何も出ていないところを見ると、痛くはないんだね」

私はこくんとうなずいたが、男に見えたかどうかかわからない。

「よし、よし」

子供の頃、寝かしつけてくれた母の声のようにやさしかった。男はそうやって胸の穴に手を通したまま、手のひらで私の背中をやわらかく打ち続けた。その手の動きがだんだん間遠くなった時、目が覚めたのだった。胸に穴があいていたとしても、何ほどのことがあるか。もうしばらく、

に乗り、鉄道に乗り換えて、来た時と同じ方法で帰るつもりでいた。

岩盤浴までの一時間、海水の温水プールに出かけてみる気になった。ジャグジーもあり、自由に使ってもいいとのことだった。室内プールなので日焼けの心配はないが、客はどれくらいいるのか。なるべく人目にさらされたくないので、時間があれば出かけてみようかと、新しい水着を持ってきた。

肌を露出しない物という一点に絞り、探し回った。「肌を見せたいと言われるお客さんの方が多くいらっしやいますので……」

そう言いながらもデパートの店員が根気よく探してくれたのは、下は半ズボンで、上はノースリーブのTシャツという感じのセパレーツのものだった。おへその上が十センチほどあいているが、伸縮がきいていて前開きなので、脱ぎ着がしやすい。紺地にグレーの花模様である。店員の忠告に従って、もう少し派手な色目にしてもよかった。

着替えようと服を脱ぎ始めた時、朝方の夢をはっきりと思い出した。そうだった。夢の中で男と一緒にいた。ベッドの上、それも裸で。私の体に触っていたのは、見たこともない男の手だった。男は体中のしみにすぐ気づくだろう。その時の男の驚いた顔を見たくないのに、ぎゅつと目を閉

あのまま男に抱いてもらいたかった。

今、鏡の前の私の体には、何も変わったところはない。自分で胸の辺りをぎゅつと押し試してみても、弾力を感じるだけで、穴があいていた形跡もない。どうしてあんな不思議な夢を見たのだろう。

プールには客がまばらだった。学校を卒業して以来、泳いだことがない。体育は得意ではなかった。何とか泳げるといったレベルだが、まさか泳ぎ方を忘れてはいないだろう。プールのサイドの人がいないところを探し、ゆつくりと水に入った。温水だった。

まず、ビート板を使つてばた足をした。二十五メートルを二回済ませると、プールの壁を思い切り蹴ってクロールで泳ぎだした。スピードを出すというわけにはいかなかったが、少しづつ泳ぐ感覚が戻ってくる。なんとか泳げる。しばらくぶりに気分がよかった。もう少しと思つてばた足を速くした途端、右足がつってしまった。痛くて動かせない。バランスを崩して、私は水中に倒れこんだ。左足でなんとか立ち上がった。プールのサイドに近寄らなければと焦れば焦るほど、あわててしまい、さらにバランスが崩れた。その上、自分の立てた波で体が揺らぎ、思うように動けない。

その時、背後から誰かが近寄り、私を抱き取った。水中で私は見知らぬ男に抱きかかえられていた。「大丈夫ですか」

返事もしないで、私はすばやく自分の体を点検した。胸の辺りと両腕にはつきりと斑点が認められた。ひざ小僧から上は水着でおおわれている。下肢には、まばらだった。何故か、性器から遠ざかるほど発疹の出方は少ない。

「こむら返りのようですね」

「すみません」

抱かれたまま、弱々しい声になった。右足のふくらはぎはびーんと強い力で引つ張られたまま、硬直している。動かそうとしても、足の指さえ思うに任せない。

もはや、斑点のことなど気にしている場合ではなかった。プールから引き上げられ、仰向きに寝かされて、バスタオルを掛けられた。ホテルのプールの係りの女性が気づいて、こちらへ向かって来るのが見える。

「大丈夫ですか」

男が大きな声で言うと、彼女は一礼して事務室の方へ戻っていった。私の足の裏を立てると、男は手のひらで足の指先を上半身へ向けて何度も強く反らせる。ふくらはぎを揉む。これを何回も繰り返した。突っ張った感じは徐々に和らいでいく。痛みはまだ残っているが、ほっとした。初めての経験だった。

「準備運動を十分にしませんでしたね。息子がよくこれをやりましたね。わかるんですよ」

立ち上がった私を覗き込むようにして、男は笑いながらわいいのだろう。男から面と向かってそんな風に言われるのは、初めてだった。思わず顔が赤らんだ。

「髪が黒くてうらやましいね。もつとも、年が違うけど。水泳帽で隠してるだけで、もう僕なんか白髪があるんですよ」

寝ているうちに、いつの間にか右手がだらりとタオルの外へはみ出していた。部屋番号を書いた赤いプラスチックの輪が、鍵と一緒にその手首につけられている。壁の時計を見ると、十時四十分である。そろそろ行かなければならない。男が立ち去ってくれるといいのにも思ってもじもじしていると、

「アトピーなんですか」

男がさりりと言った。

「えっ、ええ」

一瞬つまつたが、即座にそう答えていた。そうなのだ。私は単なるアトピーなのだ。

「ここの海水がいいと聞いたものだから」

「そうらしいですよ。私の妻も軽いアトピーでしたから、よくここに来てました。病気で亡くなってもうすぐ二年になりますよ」

「私は……一人になったばかりなんです」

ごく自然に言葉が出た。触れたくないはずのことだったのに、つい誘われるように話してしまった。それについて

言った。

「少し休んでから部屋へもどったほうがいい」

男はプールサイドにいくつか置かれている水色の寝椅子まで、私の肩を抱いて連れて行った。私は黙ったまま、そこへ倒れこんだ。

「一人で来ているんですか」

見上げると、男の顔がはつきり見えた。水泳帽をかぶっているせいも、四角い顔の形が印象的である。日に焼けた肌、高い鼻。五十歳くらいだろうか。がっしりした、大柄な体つきだった。

「僕はお風呂の付き添いでね。このホテルがとても気に入っていて、たまに付き合われるんですよ。今、マッサージをやってもらっている。アーユルベーターとか言ってたね」

お大事にと、白い菌を見せて男はプールへ戻っていった。クロールもプレストもきれいな泳ぎだった。しばらく見ているうちに、疲れたのかバスタオルをすっぽり体に掛けたまま、眠ってしまった。

どれくらいたったのだろうか。目を覚ますと、隣の寝椅子に男が腰掛けて、私を見ていた。

「かわいい顔をして寝てましたね。色が白くて、まつ毛が長い」

どう答えていいのかわからなかった。私の顔のどこがかの反応は何もない。

「アトピーなんて、痛に比べたら気にするほどのこともない。時間がたてば治ります。もし治らなくても、命に別状はない」

「そうですね。私、今までずっと気にしてたんですけど、そうですね」

奥さんは痛だったのだと思いつつも、思わず声が大きくなった。太陽が高くなり、ガラス窓から室内プールに日が差し込んできた。私たちのいる場所は、みるみるうちに明るい光で照らされた。髪がすっかり乾き、体が急に軽くなったような気がした。

「十一時から岩盤浴の予約をしてるんです」

「じゃ、いつてらっしゃい」

今度は男が横になる番だった。バスタオルを肩に掛けて、私は歩き出した。男の視線を感じたが、気分は水中で抱きかかえられた時とは全く違っていた。岩盤浴はどんなことをするのだろうかと期待しながら、歩を速めた。

*

自然石が放出する遠赤外線が、体の中の毒素を汗とともに体外へ排出してくれます。岩盤浴の受け付けに置いてあるパンフレットに、こう書いてあった。やがて案内され、

手順が説明された。

岩盤に横たわると、すぐに体が温かくなり始めた。腹ばいになった時に、とりわけ快適に感じられる。体温よりいくぶん高い平らな物で、腹部をゆっくり撫で回されるようだった。バスタオルを間に敷いてはいるが、体をべたりと岩盤に密着させているだけなのに、この感じは何なのだろう。

ほどなく汗がじんわりとにじみ出て、身につけているバジャマのような薄地の布を濡らした。時計を見ると、十五分たっている。説明によれば、ここで五分の休憩が必要とのことだった。私は渡されていたベットボトルを手に、休憩室へ行って椅子に腰掛けた。岩盤浴の部屋は薄暗く、ミストが立ち込めているが、ここは明るい。大きな窓から海が眺められた。何人かの先客が、籐の椅子に物憂げに座っている。私は水をたくさん飲んだ。

「なるべく水を多く摂取してください。その方がデトックスの効果があります」

係りの人の言葉を思い出して、もう一度ぐくりと水を飲み込む。休憩の五分はまたたく間に過ぎた。

二回目はさらに激しく発汗した。頭皮からにじみ出た汗が髪の毛を濡らし、枕にしているタオルに吸い込まれるのがわかるほどだった。首筋、胸から背、太ももからも、汗はしたたり落ちた。すると音もなく流れる汗を、私の

急に空腹を覚えた。

「すぐ汗が出て、おなかがすきました」

素直にそう言った。

「でしようね。顔がつるつるして、気持ちよさそうな感じだ。さつきプールで、あなたの部屋番号を見つけておいてよかった」

男は、さつきと私の部屋へ向かって歩き出した。自分の部屋へ行くというのに、おずおずと男の後ろをついていった。一緒にお昼を食べるだけなのだと言いついてみるが、動揺は激しくなるばかりだった。今日の夕方は帰るのだ。何が起きて今日だけのこと。それに私は、失うものは何もない。遠慮する人もいない。ただ自分の体の斑点だけが、私を引きとめようとしているにすぎなかった。

長い廊下のつき当たりに、私の部屋のドアが光っているように見える。私がアトピーだと、この人は承知しているという一点が、頼みの綱だった。驚いたとしても、すでに予備知識は持っている。どんどん近くに迫ってくるドアがさらに輝きを増して、心配しないで入っておいでと私をいざなっていた。

男とベッドにいる間中、ずっと私は何かを探し続けている。男の口の中は、温かくて広かった。十分な唾液が私の舌に絡みつき、私の体を少しずつやわらかくしていく。その感触は初めてのものだったが、その時でさえ、男の口の

皮膚は敏感にとらえる。この汗とともに体の中の毒素が外へ出ていくのだと思うと、そう快だった。仰向けになつたり、横になつたりして、私は斑点のできている皮膚をくまなく岩盤に密着させようとした。これで醜いしみ跡も治るかもしれない。そして、あの悪夢のような結婚生活そのものが、汗とともに跡形もなく消え去ってくればと願った。十五分の岩盤浴を三回済ませると、熱に浮かされたような感じがしてさすがに疲れた。温めたせいかな、こむら返りはすっかりよくなっている。

シャワーを終えて部屋へ戻る途中、エレベーターを降りた小さなホールの椅子に、あの男が座っていた。

「待ってたんですよ」

私を見ると男は立ち上がって、言った。

「おなか、すいたでしょう。一緒にどうですか」

手に持っていた袋を私の前へ突き出した。

「あなたが岩盤浴に行っている間に、ちょっと町まで行って買ってきました。車で来てるんですよ」

「お母様はよろしいんですか」

「ああ、ここで友達ができたらしくて、二人でホテルのランチにいくともんだから。僕は単なる運転手ということとです。それなら僕はあなたと一緒にと思って。それとも迷惑だったかな」

サンドイッチのような物がビニール袋から透けて見える。

中に何かを探り当てようとした。子供の頃、父と遊んだ小川のせせらぎ。決して捕まえることのできなかった、流線型の川魚の美しい肢体。すべすべと緑色の苔の生えた、丸い川底の石。男の上あごの、歯の付け根の湾曲した感じを何度も自分の舌先で確かめながら、私は途方にくれるばかりだった。

やがて男は、私の首の下に左手を差し込んで私を抱いた。朝の夢を思い出した。

「私の上半身には穴があいているかもしれないのよ」

男は返事の代わりに、きつく私を抱きしめた。

「大丈夫。穴なんてどこにもあいてないよ」

「私の体はぶつぶつができていて、気持ち悪いかもしれないのよ」

男は私の背中を撫で回した。

「こんなの、たいしたことはない。プールで言ったでしょう。時間がたてば、治ります」

そして夢の中の男と同じように、私の背中をやさしく打ち続けた。

時間がたつのを忘れた。突然、手足がもぎ取られてどこかへ飛んでいくような気がした。海泥のセラピーを受けていたあの時と同じだと、うすれそうな意識の中で思い出した。しかし今、魔法をかけられたように手足は元に戻り、男の下で汗ばんで力強く動いている。私は両手をいっぱい

に上へ伸ばし、あごを引き上げると、体を弓のように反らした。抱き合ったまま横に一回転し、私は息が途絶えたように、ぐにやりと崩れた。思わず声が出た。

婦りのバスに乗ってから、男に手渡された名刺をじっと見た。男の物だというだけで、その名刺にさえ体温を感じてしまう。会社の名前と自分の名前、住所と電話番号が書かれた、何の変哲もないものだった。

「おやじが起こした、小さな会社ですよ。今は弟と二人でなんとかやっています。一人息子は来年大学を卒業なんです。でも、経営には興味がないようで跡を継いでくれそうにありません」

渡しながら、そう言った。私はもう一枚もらって、裏に名前と電話番号を書いた。男の要望だった。この時、初めて双方の名前を知ることになった。お互いに名前があること自体、不思議な気がした。そんなことは当然のことなのに、一方では名前などどうでもいいことだった。あの濃密な時間は、まだそのまま私の体内にとどまっていた。

くねくねと続く細い道を、バスはゆっくりと走っている。ホテル側の海辺からのぼり始め、丘の上へ出てから町に向かっただけでいく。この道は海泥を塗り込められたあの時、空を飛びながら眺めた時と全く同じだった。沿線の木々の葉は、わずかな風にも鮮やかな緑を揺らす。開け放った窓から、その風は私の頬を気持ちよく撫でていく。時折、林

そう言いながら、男は手を休めずに私を撫で続けた。

背中も腕も臀部も腹部も、このしみだらけの体を嫌うどころか、懐かしげに愛撫している。亡くなった人の代わりでも何でもいと私は思った。張りつめていた気分が男の言葉でゆるやかにとけ始める。

私は絶対に人には言いたくなかった、結婚に失敗したわけ、帰りたいくない実家のことをいつの間にか話し始めていた。初めて会ったときから、余りに警戒心を与えない印象は持っていた。聞かれるとつい返事をしてしまっていたが、今は自分がこんなにしゃべったのは何年ぶりだろうと思うほど、次から次へと言葉が口をついて出てくる。

「ああ、きつと君は心の便秘だったんだね。テレビで誰かが言っていたんだけど、この言葉、すごくよくわかるでしょう」

「心の便秘。面白い言葉。初めて聞か」

「ずっと君は悲しいことや辛いことを誰にも言えずに心にしまっていたんだと思う。だから、心の便秘。今は、ほら、もう便秘は治ったよ」

「そうね。こんなにしゃべったから」

「大丈夫だよ。これからは、いつもありのままの自分でいいんだよ」

思い出して、私は小さく笑った。前の席の女性客が振り返って私を見た。心の便秘。全くそうだったのだ。男のあ

の中のそこかしこに固まって咲いている小さな白い花が見えた。野生の卵の花かもしれないなかった。木々の間から町の家の屋根が見え隠れしている。その向こうに海がかすむように丸く広がっていた。

昨日ホテルに向かうバスの中で、私は一体何を見ていたのだろうか。ただセラピーという一語に引かれて、バスに乗り込んだのだ。忌まわしいしみだらけの体。そして、予想もしなかった結婚生活の破局からくる悲しみ。それを少しでも忘れることができたなら、そして運よく心と体の傷がセラピーによって癒されることができたらと、その一念に凝り固まっていた。私の心は、景色も風も何もかも拒絶していたのだ。

「変かもしれないんだけど、君がアトピーだとわかったとき、急に懐かしくなったんだよ。こんな言い方、失礼だろうね。いや、亡くなった妻もアトピーだった。君ほどひどくなかったし、単なる体質なんだけどね。最初は彼女を思い出したというのが、本当は正直なところですよ」

これがベッドに入ってから、男の最初の言葉だった。私は何も言えなかった。

「でも、プールで君の寝顔を見たとき、全然違う気持ちになつてた。うまく表現できないけど、何と純粋な、でも何か苦しい感じもする。何故か抱きしめてあげたくなくなりました。信じてもらえないかもしれないけど」

の言葉で、私のそれは半分は治ってしまった。そしてその後、私の体は思いもしなかった反応を示したのだ。ぐったりした私を、男は自分の胸の中にすっぽりと入れた。「よかったね。どうやら君は変身したようだ。もう大丈夫だ」

間延びしたような声で大儀そうに男はそう言って、そのままの形で私達はしばらく眠った。夢も何も見なかった。出発の時刻が迫っていることが、ひどく残念に思えた。

いつの間にかバスは、町の中を走っていた。小さな港町だった。人々は通りを忙しそうに歩き、夕方の活気に満ちていた。私は男の名刺を両手のひらにぎゅっと挟んだ。二人の体液と言葉が混じりあい、私の体の内臓を打ち破って、体全体をゆっくりと侵食していく感覚がよみがえる。丁度合掌するような形になった自分の両手を、私はいとおしい気持ちでいつまでも眺めていた。

バスのアナウンスが、まもなく駅に到着すると告げている。おどおどして夫の顔をうかがっていた小さな私の姿がそのアナウンスにかき消され、駅前の雑踏の中へ吸い込まれていく。私は名刺をハンドバッグの中へ大切にしまいと、バスを降りた。そして、初夏の風の中を駅へ向かってゆっくりと歩き出した。

弦

愛知県

いつも創刊号のつもりで

同名の文芸誌が創刊されるといふ広告を、「群像」12月号で見たと知らせる人があった。その数日後の07年12月19日付け朝日新聞の文化欄に「弦」創刊という見出しの大きな記事が載った。高名な方が立ち上げ、「言葉を奏でる楽器の弦、文芸の閉塞状況を穿つ弓の弦のイメージを重ね名づけた」と命名の由来が述べられていた。自分の子どもが見知らぬ衣装を着て、突然向こう側に立ち現われたように思え、面食らった。

わが文芸誌「弦」は創刊して43年、次号で83号を数えるが、自慢ではないが一度としてこのように新聞の紙面を飾ったことはない。

「弦を奏で文芸の閉塞状況を穿つ」というような高邁な言葉は私には言えそうもないと、その記事を見て思った。

昭和三十年代のこと、新聞社やマスコミが開催する文学講座などは、未だなかったころ、永井勝という無類の文学



木戸順子

きど じゅんこ

1945 名古屋市生まれ
文芸誌「弦」同人
中部ペンクラブ理事・編集委員
短編小説集「思秋期」



合評会を兼ね伊豆文学散歩（『伊豆の踊子』の舞台、福田家の前で／2007年8月）



「弦」第82号表紙 2007年

「弦」創刊号表紙 1965年

壮士が『名古屋文学学校』を開設し、地元の作家や教育者を講師に頼んだ。思想家の本荘可宗、哲学者の真下信一、評論家の丸山静、江戸文学の尾崎久弥・三好信義、「北斗」の木全圓寿、「作家」の小谷剛・曾田文子、短歌は浅野梨郷、俳句は山田麗眺子、随筆は岡戸武平など多彩な人たちがほとんど手弁当で協力した。会場は愛知県庁近くの水産会館で、文学好きの若者が群れるように集まり、小説サークルができ、いくつもの同人誌も生まれた。そんななか「新樹」（戦後すぐ名古屋で発行の雑誌とは異なる）と「草」という同人誌が合併して「弦」を創刊した。東京オリンピックの翌年、一九六五年のことである。ベトナム戦争が拡大し、ベ平連などの反戦運動の声を他人事でなく感じたころである。

一九四九年に戦後第一回芥川賞を『確證』で受賞した小谷剛が「作家」を主宰していた。作家同人の曾田文子が「弦」の指導者であったから、「弦」は「作家」の弟分のように見られていたが、我々は「作家」も「弦」も同人誌にかわりはないという誇りを持っていった。曾田は自身も芥川賞候補にのぼったこともある名古屋では気鋭の作家で、テレビドラマの作品なども手がけていた。明るく開放的で小さなことに拘らない性格は人の心を捉えるものがあつた。

同人誌は三号で潰れると、よく言ったものだが、「羅針」「熱風」「風」「未開地」「造子」そして「無名」という同

人誌が次々と消えていった。それらの同人誌の中からどちらかといえは取り残された人、それでも書かねばおられない人たちが「弦」に合併する形で加わった。曾田の「一絃」になってやりなさい」という明快な一言に仕切られた。

そのころから「弦」は閉鎖的にならず、外に窓を開いて志のある人を受け入れて一緒にやってきた。これが「弦」の特徴でもあつた。曾田は一九八三年に病魔に倒れたが、遺志はその後四半世紀も続いているのである。「作家」を継いだ「季刊作家」が先ごろ休刊するという。事情はあるにせよ、そうなる前になぜ手を打たなかったのかと悔やまれる。同人誌の危機は、原稿が集まらないとか、事務局がなくなるとか、資金難などが原因となる。我々「弦」でも、一再ならずあつたが、そのたびに皆で知恵を出し合つて続ける努力をしてきた。

同人誌の中には自分らの書いた作品を合評するだけに集まるといふ会があると聞いて驚いたことがある。また、ある詩を中心とする会では、自作を朗読するのが主で、批評は一切なしと聞いてさらに驚いた。活発な合評は視点を広げるのに役だつし、何よりも自己陶醉に鉄槌を下す神のような存在でもあると思つてゐるからだ。

我々「弦」は毎月欠かさずに読書会を続けて四十三年に及んでいる。古今東西の小説から現代の話題の小説まで、

作品を決めて読んできて話し合うというそれだけのことが、各々の浄化作用とも活力源ともいふべき効用がある。同人が分け隔てなく意見を述べ合い、耳を傾ける。時代の風潮に流されない文学が見えてくる。たとえば若い、病、死に係わる現代の小説のテーマをどのように捉え、感じているのかを考えてみる。俗にまみれないで自分の文体で表現してみたい。自分史であれ、私小説であれ、とことん自分と向き合つてみたい。社会や環境のテーマであれば真がどこにあるのかを見極めたい。

小説を書くことはたとえ虚構の世界であっても、真実を超える力もあると信じたのだ。同人はいつも数十人で全員が書き手である。メンバーは少しずつ代わってはきたが、この精神は受け継いで伝えていきたい。

文学は耕して耕して自分を創つていくものであり、自分がいくら愚鈍であろうとも、それでも書かないではおられない。まさに「初心忘るべからず」と、いつも創刊号を出す気概でいたいのである。

(代表／中村賢三)



例会後の忘年会 2007年12月

弦

代表・事務局 〒463-0001

名古屋市守山区小幡中三・四二七

☎052-794-3430

それぞれの深紅

遠野明子 はるこ

「家路」のチャイムが響いて来た。それで私は目が覚めた。広げた本に伏したまま、私はうたた寝をしていた。いつ寝込んだのか分からない。チャイムはのどかに続いていた。私の住む千葉県S市では、夕方四時半になるとこのチャイムが鳴り渡る。どこからともなく漂い来る夕方のチャイムには、子どもの頃の日暮れを呼び覚まされるような哀感がある。もつとも、私の子ども時代は昭和二十年代だから、チャイムなどは鳴らなかった。それでも、遠くに仕舞い忘れたものがあつた気分

に誘われるのは不思議である。私の郷里である九州宮崎市でも、偶然だが同じ曲のチャイムが鳴る。小学校入学直前に住み着いた土地だから、やはりあそこが郷里ということになるのだろうか。しかし、私はあの土地がどうも好きになれない。土地の気風が私に合わないからだろう。時間にルーズなのは南国の特徴かもしれないが、日向時間と言

う異名が堂々まかり通っている。何事も、暢気なのか、横着なのか、だらしがいいのか見当がつかない。だから若い日に私はあそこを飛び出したのだらう。今は、母がいなくなったことで、いつそあの土地が遠のいた気がしている。

背筋を立て直すと、書棚の硝子が赤かった。外の空が映っていた。近くのマンションの窓が、夕日を受けていつせいに反射している光景が映りこんでいる。幾片もの、千切れた二の腕のような雲が赤く映えながら硝子の中に浮いていた。私は車のついた椅子を後方へ転がして、窓外の空を眺めた。マンション群の彼方に、鋭く光る避雷針が目を射た。天を刺す剣のように見える。絹を引き伸ばしたかと思える薄く美しい雲が、遙か遠くまで伸びていた。不意に私は秋の気配を強く感じた。考えてみればもう九月初旬だった。椅子を回すと、部屋がうす赤い色水に浸されて見えた。身の染まるような赤は切ない、と思う。

母の見舞いに帰郷した折の、大淀川の土手で見た夕日を私は思い出す。

ちやぶ台ほどと言つては大袈裟だけれど、子どもの頃の私なら、きつとそう叫んだに違いない。大きな夕日だった。木の橋だった高松橋はコンクリート製になり、そのシルエットの背後で、落日はゆらゆらと燃えていた。川面は赤い帯であった。波影と織り合わさった帯が、河口へ向けて長く静かに流れていた。命の象徴である血の色にも見えなくはなかった。気がつけば、夕風になびく私の薄い夏スカートにも日は色を映していた。

母の手術後の回復をきちんと確認出来るまで、私は留まることが出来ないのだった。今から四年前になる当時、私はまだ仕事を持っていた。町医者での医療事務であったが、週末を挟んで無理を言つてぎりぎりもらえた八日間の休暇が尽きようとしていた。翌日は千葉に戻らねばならない。そ

んな日の夕刻に、私は実家近くの川沿いを歩いたのである。

母の癌は大腸に発していた。八十七歳、三十八キロ、背丈一四五センチ。その腹部を開き、癌を切り取つて縫いつた五時間半は長かった。

待機の家族は他にもいた。和室もあつて、そこで寛ぐ家族もいたが、私は手術室前のソファに座り続けた。文庫本を広げても、グラフを開いても、集中は出来ない。

「私がいるわ」。そう言ったので弟は一旦帰つたのである。弟は「二人でいることもないしな」と言ったが、彼はそこに居続けることに耐えられなかったのに違いない。しかし、途中で異変でも起きれば、母の命は手術室の中で途絶えるかも知れないのだ。そこを離れる方が、私は恐ろしかった。

手術室は幾室かあつたが、そのすべてのドア上に「手術中」のランプが灯っていた。二時間くらい経つた頃、奥の手術室前で大きな悲鳴が上がつた。

「お父さん、イヤーツ、イヤダア」と泣き叫ぶ女の声であつた。辺りを切り裂く悲鳴はさらに高まり、やがて、六十間近と見える私くらいの齢の女が、喚きながら両腕を娘二人に吊り上げられる恰好でやつて来た。女の足はグニャグニャとして、歩くことはおろか、床を踏みつけることも出来ない様子に見えた。「イヤーツ」ともおも喚きつつ、女は引き摺られながら前を行き過ぎる。女のTシャツはずり上がり、肉のある腹が出ていた。娘らは「お母さん、しっかりして！」と言ひ、「すみません……」と私などに頭を下げた。女はたつた

今、伴侶の死を告げられたのに違いない。私は一挙に緊迫感を煽られた。その一方で、夫の死に手放して慟哭する女に、ある種の感動に似たものを覚えていた。あんな女もいるのだ……と。

固唾を呑むそんな情景もあつた母の手術であつたが、彼女の生命は粘り強かつた。術後も血圧等は安定しており、集中治療室からはその夜のうちに病室に戻ることが出来た。弟一家がそろつて母を見舞つた。部屋には戻つたが、母は八度近い熱が出ていた。点滴には抗生物質が用いられていた。弟の妻の携帯が病室内で鳴つた。「お母さん、携帯切つてないの！」下の方の姪が、驚いて自分の母親を病室のベランダに突き出し硝子戸を閉めた。

狂う計器などは使われていない部屋ではあるが、うかつというか、あまりに非常識であつた。母はまだ水枕をしている身である。院内感染も案じられた。「ふう」と、深いため息が漏れた。まだまだ油断は出来ないのである。今後の経過報告も、あの弟夫婦ではあてには出来ない。

私の心には、ポツンと置き捨てられた小石のように見えた母の姿が、容易に胸を去らなかつたのだ。

三

遠くから私が見舞うまで、母のベッド周辺にはオムツ以外には病院貸与らしき歯磨きコップ以外には何もなかつたのだ。入院から五日が経つていたのに、である。私は弟夫婦の病人への労わりのなさに無性に腹が立つた。母の腸閉塞は癌が原

因と分かつて、閉塞部に外から穴を開け、詰まつた横行結腸部の通りをよくする簡単な処置だけが施されていた。当面は食欲の回復を待つて、考えろという方針が出ていた。老人の癌は進まない、そんな思い込みがあるにしても、入院に際してせめて病人の心の慰安になる物を思いつけないのか。時計もカレンダーすらも母の病床にはないのだ。

「なあに、ここにおればそんなものは無意味じゃ。いいとよ」

母は分かつてのことだから、といった気配で拘らぬふうを見せたが、母が置き捨てられた人にも見えて、私は激しく胸が痛んだ。

母は五十年近くも食品を扱う店をやつて来た。父は亡くなる前に、自分の死期を予感したのか、無理してアパートを建てた。むろん、借金をして

である。父は一年後には被害妄想も出て来て、呼吸器の方の病勢もさらに進み、亡くなった。母は夢中で働き、借金を返済し続けた。のちには店舗、アパートの両方を全面改築する大事業をもやつてのけた。サラリーマンになつた弟の結婚に際しては、若夫婦とはドアで往来が可能ないように、一部をさらに改築した。弟夫婦の車の保険、弟のたびたびの新車購入の頭金など、すべて母の懐から出た。母にすれば、小学生で父親を失くした弟が不憫だつたのだらう。その点では甘い母親であつた。なぜ、こんな憐れな目に遇わねばならないのだ。私自らは、若い日に都会に出奔したくせに、どうであれ、母の傍にい続けた弟に腹を立てる自分の身勝手な脇へ置いて憤つた。けれど、それを聞く母の目はしよほしよほとして、寂しそうであつた。

うっかりした、と私は気がついた。そんなことをあらわに怒れば、母の立場の惨めさを際立ててしまふことになるのだ。それに、母は現実派で逞しい精神を持つてはいたが、しかし昔の女であった。たとえ寂々たる思いが胸の内にあつたとしても、子がどんなに身勝手でも、決して我が子を批判はしないのだ。

午後の検温で看護師が入ってきた。私は挨拶をした。

「食事の大半を残されるとですよ。もう少し食べやらないとねえ……」と、彼女は案じた。

元気のいい青年介護士も親切であつた。母はその青年が気に入っている様子ではあつたが、運動をさせようと心砕いても、まるで意欲をみせないと言うのである。「脚が痛いからいい」と頑強に拒否すると言ふ。やはり母はおかしい。危ない傾向である。彼女は頑張り屋を自負して来た女であつた。大雑把で神経の太いところがあり、そこが私は嫌だつたが、けれど、どんな時にも諦めない根性の根太さがあつた筈だ。それは短気な私が決して受け継ぐことのなかつた母の身上でもあつた。

私は殺風景な母のベッド周辺に、花の籠や、時計、カレンダー、母の好きな画集を持ち込んだ。母は絵を見るのが非常に好きであつた。これは父の影響であつたらうか。父は琴、尺八などを奏する音曲趣味があつたが、若い日にはよく油絵を描いたそうである。どんな傾向のものを描いていたのか、残っていないので分からないが、母はフランス印象派の絵が好きであつた。ルノアールの縮

小された印刷絵を、私は額に入れて母の目からよく見える窓辺に置いた。

「おやおや、だんだん賑やかになるね」と、母は喜んだ。食欲も出て来た。

母は不思議とテレビはほとんど見ない。例外はNHK教育テレビの「日曜美術館」だけである。能楽も好んだ。若い頃、博多の大きな材木商の家で、下女中から上女中にシユッセして、母はその家が自宅に持つ舞台で主人夫婦の稽古を観たりしていたそうであつた。そういう暮らしを間近に眺めた母は、よほどそれが印象に深かつたと見えて、現実的な働き者の一方で、平俗な娯楽を軽蔑する傾向が強かつたのである。

私のいる間に日曜日が巡つて来た。私はテレビのある場所まで母を連れて行つた。母の好きな番組が始まつた。母はあらつ、という顔になつた。番組は偶然にも彼女の好きな印象派の展覧会案内を映した。母はそれを観つつ、だんだん饒舌になつた。

「ああ、ほれ、ほれ、東京に行った時、あんたが連れて行つてくれた上野で観たジャポニズム展にあつた絵じゃ。ゴッホじゃねえ。セザンヌはキリキリした巧さがあるが、何か絵が冷たい。あの二人は仲が悪いとよ」

早い時間で患者は誰もその開放空間にいなかったが、看護師は通りがかりに母のはしゃいだ声に足を止めた。

「あら、珍しい。テレビ見てるの。病室にも絵があつたけど、静江ちゃんて絵が好きなのネエ。趣味が高尚だわア、スゴイね」

「下を見ちゃならん」と言われても、月光が唯一の頼りである深い夜の中で、一步を踏み外せばそれこそ千尋の闇が遙か下に覗いているのである。しかし、渡らねばならないのだ。私は竦んで動けない。母はついに私を抱き取つて、この穴だらけの橋を渡り切つたのである。「目をつぶつていなさい。けつして開けてはならんよ」と言つた。その場面だけが、引き揚げ時の私の唯一の記憶であつた。

手術の前日、以心伝心とはこのことか、母の方から引き揚げ時の話を始めたのである。私は真剣に聞いた。

母は遠い所を見つめる目つきで、「酔つたように」話すのだった。考えてみれば、母にとつてこの記憶を共有できるのは私しかないのでもあつた。戦後生まれの弟には通じない話に違いなかつた。

五

昭和二十一年三月に、母と私は朝鮮から引き揚げのために夜道を歩く旅に出た。母は「七十里の道のり」と言つたが、しかしこれは正確かどうか分からない。三十八度線を越えるまでが決死の行進であつた。満州からの引揚者の話をよく聞くが、母達がロスケと呼ぶロシア兵の出没が危うくて、北朝鮮からの引き揚げは殊に危なかつたのである。

父は商社の社員として、昭和十八年に生後四ヶ月の私を伴つて、今の北朝鮮の鎮南浦という街へ赴任した。朝鮮総督府と民間の商社が一緒にな

を呼ぶ。そして、白々しくならぬ配慮をもって、しかし意識的に褒めるのだった。老人は、褒め言葉を恥ずかしいほど素直に喜ぶ。母も例外ではなかつた。羨んだ目が大きくなつて来た。やや得意そうな色が母の顔に浮かび出て来た。

四

担当医に私と弟が呼ばれた。手術しなければ、月単位での命が危ういかも知れないと言ふのである。進行性の癌と言ふ。事態の深刻さが改めて私を撃つた。弟はさすがに落ち込み、言葉を発することが出来なかつた。私達は決断した。母には今穴を開けてある腸閉塞部を全面的に切り取る手術と説明した。母には癌であることは伏せられていた。始めは「怖いねえ。お腹を切るとね」と渋つていたが、その他の内臓はすべて若いと医師に告げられると、「それなら最後の根性を出そうかね」と承知したのであつた。

ほつとした後、私はにわかになつた。母は助かるだろうか。このままになるといふことはないか。小さな身体だ、麻酔のショックは起きないか。輸血は、感染症は――。不安は限りがなかつた。それは夜道で親を見失いかけた幼児の恐怖心に近かつた。張り裂けるような不安が私を襲つた。朝鮮から引き揚げて来る時の幼い私も、おそらくこんな気持ちだつたのではないだろうか。当時三歳になつたばかりの私には、ほとんど記憶はないのだが、深い谷に架かつた穴だらけの石の橋に怯えて、どうあつても足の出なかつた恐怖だけは覚えてる。

つて作つた半官半民の合弁会社であつた。当時、そこは日本の統治下にあつた。決して外国ではなかつたのである。民間人には詳しい戦況は知らされてない。日本人ばかりの住む街で、私達は僅か一年ばかりを恵まれて過ごしたのであつた。が、十九年には父は現地召集で兵隊に取られることになつた。二十年八月に日本が敗戦を迎えた時には、母子二人であつた。もちろん、父の生死は分からない。接収された社宅を出て、母はまだ会社のものであつた独身寮に引き移つた。厳しい寒さに備えて母は燃料の調達に奔走する。足元を見られて高額な取引を強いられるも、オンドルもない粗末な寮で、二歳の子供を守らねばならぬ母は従わざるを得ない。悪いことに真冬になつて私は「はしか」に罹つた。母は新聞紙で窓を覆つてすきま風を防ぎ、高熱で喘ぐ小さな子供を氣遣つた。そんな中で、母は引き揚げの準備を少しずつ進めたのである。

五

年が明けて、二十一年になつた。母はある日、引き揚げ援護局へ登録に出かけた帰り道で、馬に乗つた保安官に声をかけられた。母は怯えた。理由もなく拘引されるのか？ 混乱した街中では敗戦国民には何が起るか分からない。知り合いに頼んで来た小さな子供のことを思い母は震え上がった。日本が敗戦国になつたとたんに、向こうの人々は堂々と物品の略奪を始めた。口惜しくても我慢しなければならぬことが続いた後であつた。だが、声をかけた相手はすぐに馬を降り、「奥さんほくですよ、金ですよ」と、母に手を差し伸べた。よくよく見れば、父の使いで家にもよく連絡に来ていた、会社の給仕の男の子であつた。母は

私用に作つたおやつを金少年に持たせたり、父も配給の品を貸しい彼の一家によく持たせてやつていた。支給される地下足袋などは、父には不要の品で沢山貯まつていた。少年給仕の一家は、靴のない暮らしをしていたのである。賢くて真面目な少年に、母はお駄賃を包んでやつたりもしたのだつた。その金さんが、新政府の登用試験に合格し、保安官になつていたのである。彼は母を懐かしんで「困っていることはありませんか」と心配してくれたのであつた。彼の親達も一家の親切を忘れておらず、お役に立ちたいとわざわざ申し出に来た。母は地獄で仏に会つたのだつた。母は彼らに餅をついてもらい、それをアラレにしたのであつた。嵩はあつても軽く、子供にも安全な食べ物である。水でふやかし、塩を振ればいいのである。「朝鮮の人にも心あるいい人もあれば、ズルイ人も怖い人もいる。考えたら日本人が一番悪いんじゃない。元々、あの人達の国を威張つて支配して来たのだからね。国民はみんな、国の政策の犠牲者じゃ。あの時代は日本中がみなそうじゃつた。でも、今更誰を恨んだつて仕方がない。時の勢いには誰も勝てん。国の大きな過ちじゃが、ね」

母は時々、そんな感想を挟んだ。

とにかく、生きて内地に帰ることが第一であつた。米を帯に縫いこんで身体に巻き付けることを母は考えた。一箇所がほつれば米が全部こぼれる。十五センチほどに区切りをつけて縫いこんだ。荒土に直に寝ることを考え、蒲団の綿を出し、その皮袋だけを巻いてリュックに詰めた。実際の野宿で、それらはすべて役に立つた。安全な場所での野宿の折に布団の寝袋は私を包み、帯の米を

出して、アルミ碗二つを合わせ、水筒の水、塩を入れ、土を掘って燈明ろうそくを立て、囲った石の上でご飯を炊いたのである。私は「おいしいね」と、うす汚れた顔で嬉しそうに笑ったのである。バクレン女と連れになり、「あんたは子連れ、私は一人、水筒を取り替えて上げよう」と大きな水筒を母に渡してくれたと言う。「バクレン」と言うのがよく分からなかったが、私はあえて質問はしなかった。

私達はいろんな幸運に出会ったのだ。夜になれば又歩かねばならない。眠たい私の手を引いて、ひたすらに歩くのである。団体からはぐれるわけには行かないのであった。眠りながらも、小さな私が無意識に足を運んだのは、母の手を離れば、又、母に何かあれば、自分が生きてはおれぬことが分かっていたのである。

その時の引き揚げ者団体中、生きて本土の土を踏んだ子どもの中で、私は最年少であった。赤ん坊は途中でみな下痢による脱水で死んで、親達は野に放置して来るしかなかったのだ。船は幸いにも舞鶴ではなく、母の生家に近い博多港に着いた。出発は三月、着いた時には夏が近かった。母のシヨールを改造した私のワンピースは、引き揚げ船の上で私が暑くて脱ぎ捨てたために盗まれ、私は汚れた下着一枚で上陸した。アメリカ進駐軍によって、頭からDDTを噴射された私は、噁せ込みながらも真つ白の頭で、そんな自分を照れたのか、ニツと笑ったそうである。支給された天竺木綿のシユミーズを被せれば、それは足首までもあって可笑しかったそうだが、その時の光景を眼前に見ているかのように、母は「オッホッホ、オッホッ

全員が甲板に出て「ああ、生きて帰った！」と号泣した。父は旅費を作っては舞鶴、博多を往復したわけだが、援護局で見る乗船者名簿は、ほとんど当てにならないかった。現に、母達引揚者は、横断幕を見るまで上陸地を知らなかったのである。

帰還一日目は博多のお寺に泊められた。そこから翌日に母の田舎へ帰り、このことを父は田舎の祖父から知らされたのである。父は飛ぶようにして田舎へ来た。その時の父との再会も、私には何一つ記憶がない。博多のお寺の広い畳敷きを見て、私が「お母さん、今夜は畳の上で寝られると？」と小躍りして喜んだことを聞き、父は私を抱きしめて泣いたそうだが、私には一切覚えがない。

三、四歳頃までの子供の隠蔽された記憶は、親があればこそ話し聞かされて存在できるのである。逆に又、親の生涯は子が記憶していればこそ、その命が絶えた後も、一代くらいなら存在し得ると、私は日暮れの迫る自室で、解けた糸を追いつつ、改めて思うのだった。

その後どういふ伝手があったか、父は宮崎に赴き、生活の目的が立つと私達をそこに呼んだのである。会社の方は一旦閉鎖されていた。戦後復興したのか、今その会社は一部上場会社として現存している。だが、終戦直後に勤め人を廃した父は、家を持ち食品店を開業した。父がどのような方法でそれだけの資を得たのかは分からない。父は論が立ち、同時に家具まで造るような凝り性で器用な男であったけれども、一方で、人を引きつける妙な才能もあった。地位のある人間に渡りをつける術を知っていたのは、新聞記者時代に身につけ

たものだろうか。「俺は頭で勝負する」と豪語していたそうである。自慢の「頭」で人脈を得、お金を借り得たのであろうか。母は客商売などしたことなかつたはずだが、父は女中奉公をしていた時の母の辛抱強い性格を見込んでいたのである。

「ホ」とベッドの上で笑い声を上げた。私が来た時とは、別の母がそこにいた。

命がけの体験を踏み越えて、あたしは小さな娘と生きて帰った。肉親の縁の薄かった主人が「俺に肉親が出来た。お前は元は他人だが、瑞江は違う。俺のかけがえのないただ一人の肉親だ！」そう言うて、あんたの誕生をあんなに喜んだのじゃもの。あの人の唯一の肉親を絶対に死なしてはならん、この子と二人生きて帰る、と決意した。

辛い時には何の、私は三十八度線を越えて帰って来たんじや、こればかりのことには負けられぬと思うた。

母は「運も、味方をしてくれたね。家族の誰も死なんやつた」と言い添えた。

私は美しい和菓子を懐紙に載せ、病室で簡略に抹茶を点てた。思いついて、市内で調べて来たのであった。母は非常に喜んだ。どこで覚えたものか、作法どおりに茶碗の正面を避けて回し、軽く押し頂いて少しシナをつけて飲んだ。そして、「ああ、結構なお点前ですこと」と言った。頬には内側から灯したような赤味が差していた。

「あらあ、静江さん、えらい嬉しそうですわね。何や急に元気になられて、どうしやつたの？ 魔法にかかったみたいやねえ」

私が茶碗を洗って部屋に戻ると、看護師が目も瞠っていた。

後で思えば不思議なことに思えた。死線を越えて来た時の話を回想することによって、母は自分に自信を取り戻したのだ。そして、目前の死線をもう一度超えることが出来たのであった。

父とは仲のよかつた従兄弟に後に飯塚の拘置所長をしていた人がいる。この人のことは、私はよく覚えていた。宮崎に犯人を護送して来ると、我が家へ泊まった。父と従兄弟とは夜遅くまで楽しそうに話しこんでいた。この小父さんは、寝る時には拳銃を筒筒に隠したが、それを夜中に何度も起きて確認するのだった。父とこの人は大それた学んだが、父は生家の実父が死んで学資が絶え、途中で行方が分からなくなった時期があつたそうである。そんな時期に、父は母と博多で出会ったのである。母が出会った頃の父は、フクニチ新聞記者時代である。非常にハンサムで洒落者だつた父は遊び人めいて見えたそうだが、真面目な田舎娘であつた母を見込んだところは偉かつたと言え

私は今でも夜中は起きることが多い。人の寝静まった深い夜というものが、私はなぜか好きなのである。夜への強い親和感がある。それで昼間に何の不都合もないから不思議ではある。三、四時間も眠れば自然にパツクリと目覚める。医者は「シヨートスリーパー」だと言っている。そういう人は他にいろいろいるので、一種のタイプであり、それほど珍しいことではないのだそうだ。私はひ

この話を聞いて、そうか……、と私には合点の行く部分があつた。

私は小学校に上がる頃まで、夢遊病の症状が出て両親を悩ませ続けた。夜中になると、私はむっくりと起き出して、ふらふらと外へ出たのである。両親は夜中になると寝床にいない私に慌て、何度も裏庭の畑の中に立つ私を発見した。私はただ突っ立って、虚ろな表情のまま空を仰いで立っていたそうである。父はその都度、そんな私を家に抱き入れた。母は「気味が悪い……」と、怯えたようであるが、これは引き揚げ時に、夜に歩き続けた幼児の、一種の睡眠障害に違いなかつた。私には意識の上の記憶はほとんどないが、これは身体における記憶だつたと思うのだ。

父は私達よりも先に復員していた。闇のかつき屋をしてお金を貯め、商人宿を自分の連絡先にしていた。そして、引き上げ船の情報を援護局に行つて調べた。舞鶴に着くと聞けば舞鶴へ、博多に着くと聞けば博多へ、と駆けつけた。その間には、福岡の母の田舎とも連絡を取つた。

一方、私達引揚者の方は、海原ばかりでどこに着岸するかなどは一切知らされない。陸地が見えているのに、船は沖に停泊して何日も船内に留め置かれた。見えている陸地がどこなのかは不明のままである。沖での停泊は、検疫に時間がかかつたせいだろう。一人でも病気の者が出れば、上陸は許されないのである。しかしある朝、船は動いた。いよいよ内地の陸が近づき、「お帰りなさい」の横断幕がかすかに目に飛び込んで来た時には、

そかに考える。そのタイプを作り上げたのは何か？ プログラムされたのは身体の記憶からではなかつたろうか、と。

七

この九月の彼岸過ぎには、母の丸三年目の命日が来る。あの手術からほぼ一年後に癌が転移して、ついに母は力尽きたのである。しかし最後まで生きる意欲は小さなかつた。去年は三回忌であつたのに、私は帰郷しなかつた。理由があつた。墓なんて、とも思っていた。遺骨なら、焼かれたばかりの熱い骨を、頭蓋、喉仏、胸骨、手、足からそれぞれ一部を拾い、二重ガーゼのハンカチに包んで持つて来た。葬儀を終え、焼き場から戻ったその足で飛行場に向かい、二時間半後には夫や娘とともに機上にあつた。雲を下に見る機内で、そつとバッグの中に手を入れると、母の骨はまだ温もりを持っていた。羽田に着いた時刻には、骨の温みが判らなくなつていた。今は仏壇代わりの柵の上に、蓋付の陶器のキャンディーボックスに入れて置いてある。八角形をしているのが、どことなく骨壺らしく見えなくもない。

種ぐさの想いが去来して、私は煙草に火をつけた。

書棚の中でキラッと光るものがあつた。私は煙草を手を立ち上がった。本の手前に、香水の小壺がいくつか並んでいる。光つたのはその横に立っている一本の口紅であつた。

ああ、あれか——。私は煙草をもみ消し、硝子扉を開いた。すでにやつれかけている夕空が、

観音開きの扉とともにすと左右に割れた。私は口紅を取り出し、彫金を浮かせた金色ケースのキヤップを抜いてみる。まっさらの棒紅が現れる。血の色を思わず深い赤である。一箇所だけ艶が消えているのは、一度だけ私が唇に引いた跡であった。

還暦祝いだと言って、外国製の口紅をもらったのは三年前の二月である。贈ってくれたのは嫁いでいる娘で「深紅の口紅の似合う、素敵で六十代でいてください」と、小さなカードが添えられていた。「いて、くださいか」。何だか、慰めに満ちているなあ。そんなことを呟いた覚えがある。生まれた時の干支に立ち返る還暦は、二度目の赤子と言うわけであった。だが、今は祝いの赤いチャンチャンコなどは誰も着ない。

私は四百六十で生まれた赤子であった。福岡の叔母の証言が正しいなら、千七百グラムのかかりの未熟児である。生家の納戸でお産をした母親は、骨盤が狭く、胎児は耐え切れずに早めに出て来たらしいのだ。出ては来たが、お乳に吸い付く力もなかった。祖母が気長に、砂糖湯を含んだ綿で赤子の小さな唇を濡らし続けた。「甘いさね、赤ん坊はペロペロ舐めよる。それであんたは助かったったい」。叔母は毎度、ここを強調する。初産の母親は冷え込む二月の寒気を、衰弱した力のない眼で案じ続けた。山間の村では最も冷え込む時期であった。体温の低下も即、死に繋がる。祖母は赤子を真綿で包み、近所から借り集めた湯たんぽで周囲を囲った。終戦二年前の産婆の時代のお産である。今なら、ただちに保育器に入れられ

て、未熟児網膜症になりかねない。後遺症で色盲か色弱になる恐れもある。

「姉ちゃんも必死やったが、ばあちゃんも必死やった。初孫やきね。それでん、ニワトリよりも軽か目方で出てきた子が、助かったばかりか、ハイハイも出来んうちに朝鮮まで渡って、生きて帰って、よう当たり前にシャンと育ったもんたい」

三十歳だった父はこの時、我が子が生まれるとあって、召集を逃れるために新聞社を辞めて、何とか親子が無事に暮らせる道を画策し、伝手を求めて博多で就職運動をしていたのであった。

宮崎に母を訪ねた帰りに、私は幼ない日の思い出がある福岡の田舎へ回ることがある。宮崎などよりは、私にとつての心の「ふるさと」はここである。福岡の方言を聞くと、懐かしさが寄せて来る。一度だけ夫を伴ったことがあった。叔母は「今日は瑞江ちゃんの旦那はんもおらすけん、標準語にしとこう」と言った。叔母は三人姉妹の末であり、この人が家の跡を継いでいる。むしろ貧しい農家なのだが、村では一番古い家ではある。そここの継承者たる自負が、こういう時にチラと覗く。叔母は能筆であり、喜多流の謡いをたしなむ。村の婦人会の相談役でもあって、一目置かれて

いるらしいことを、それとなく話すのでもある。彼女は標準語を非常に意識しているのだ。叔母の「標準語」に夫は微笑んだ。そしてニワトリよりも軽い赤子の話を興味深く聞いていた。そのような赤子が、還暦を迎えたのである。母の手術の翌年、二月のことで、この年の九月に母は逝ったのだ。

始めるのである。一本、又一本。足を食べつくした蛸は、今度は胴体をひっくり返して自分の内臓をも食い尽くした。そして水槽には、静かに水泡だけが立ち昇っていた。

だが、蛸は死ななかつた。今は黄ばんで濁った水だけが湛えられている水槽で、
「永遠に——おそらくは幾世紀の間を通じて——ある物すごい欠乏と不満を持った、人の目に見えない動物が生きてゐた」
のである。

プール。巨大な水槽……。水を深く湛えた場所は私の夢にもよく登場する。考えられないほど深いタイルの水槽がたびたび出て来るのだ。私はいつもその底にいる。ただし、水槽だが水は入っていない。そして、金属パイプの梯子がある。それは私の背丈よりかなり高い所から始まっているのだ。何もなかった筈のタイルの壁に、いきなりドアが出現する。そこが開く。すると男がそこから現れる。男はサーファーのように真っ黒のゴムのウエアで頭から足先まで覆われている。私は恐怖でいっぱいになるのだが、どこにも逃げ場はないのだった。恐怖で縛り上げられた私は絶叫する。たいてい、この叫び声で私は目覚める。心臓が高鳴っていて、起きて水でも飲まなくては恐ろしくて再び眠りにつくことは出来ないのだ。けれど、不思議なことに実物のプールも水槽も、まるで私の気を引かない。想念や夢の中でだけ、私は水槽というものに興奮するのである。多分、ウンダのフロイトだのを読めば、夢の象徴性のこと書かれてはいるのだからけれども、そんなものも首っ引きになるのは嫌なのだ。「ああ、そうか」

有り難いような、凹みたくなるような私の還暦祝いには他からも届いた。独身で看護師の義妹からも、忙しい中にありながら小包が来た。若い子のような言葉遣いでメッセージがついていた。「春らしいでしょ。絹とウールの混紡です。お顔の近くに柔らかな色があれば、チョイ・キツ目のお義姉さんもやさしく見えること受けあい！」

サーモンピンクのマフラーは手触りがよかつた。「やさしく、美しく見えます。ありがとよ」と、葉書で礼状を書いた。

三十有余年の付き合いがあるY夫人からは、赤の楽茶碗を手渡された。

「お家で益点前するのに可愛くていいかな、と思つてね」

Y夫人は微笑んだ。私が茶の稽古を再開したのを知つてのことだ。

私はその場で開けて、鑑賞した。赤楽とは呼ぶけれど、実際には橙色である。焼成温度の低い赤楽は、高温で焼き締める黒楽の気品に対比すると、くだけてやさしい暖かみがある。夫人の選んだものには正面に白い刷毛目が一筋走って、景色が若々しかった。

義妹も、Y夫人も、「赤」からズレた色を選んでいたが、真正面からの赤は娘の口紅だけである。口紅の色は、奥の方に黒を秘めているような赤であった。無難なピンク系しかつづけたことのない私には思いもよらない色であった。その分、ときめくような気分でもない。グイと引いてみた。

などと、もつともらしく頷く自分はお嫌だ。謎が必ず解かれなくてはならないことはない。それに、心理学者が必ず謎を解くとも思われぬ。私はそんな自分を放置していいのである。人間は多面体だ、などと中和剤のようなことを言っただけです。私にはもつと嫌だ。私は自分を放置するだけである。

朔太郎のこの恐ろしい話を未だに忘れないでいるのも、多分忘れられた水槽が大きく私を刺戟したからだろう。「宿命」という詩集の中にあつたのだが、死んだのに死なない蛸の、見えない執念がいつそう私の心を捉えたのであろう。

十二畳の水槽の隅には煤のような闇が溜まり始めていた。家の中が濃い闇に沈まぬうちに、シヤキシヤキとせねばならない。

夫は広告主との打ち合わせがあるから今夜は遅くなると言つて出た。彼は都内下町の小さなマンションをオフィスにして、友人と二人でデザイン事務所をやっている。友人は独身でそこは友人の住居でもあつた。折込チラシから店舗内装、居酒屋メニューに至るまで、何でも引き受ける。そして、大した稼ぎにはいつもならない。

今夜は一人だから慌てなくてもいいのだが、と言つて夕餉の支度を簡単にしようと言つても私は私にはない。電車の中で主婦の二三人が「今夜は主人が遅いから簡単でいいの」などと、まるでしゃぐように大声で喋っているのを聞くと、なぜか私は不快になる。そういう主婦らが何か薄汚く見えるのだ。

椅子をくると回した。リビングが真っ直ぐに見通せる。私の部屋は六畳の洋室、隣の和室が夫の部屋である。二室を合わせた広さがリビングルームになっている。その空間が薄い闇を溜めて、水族館の深い水槽のように眺められた。見慣れた部屋がやや違って見える。少し、興奮する。そして、朔太郎の水槽の中の蛸の話を、私は突如思い出した。

ある水族館の地下の水槽で、ひさしい間、飢えた蛸が飼われていた。蛸は死んだと思われて、誰からも忘れられていたのだ。けれど蛸は、青ざめた硝子の天井からの光線が悲しげに落ちてくる水槽の岩陰に、恐ろしい空腹に耐えて生きていた。あまりの空腹に耐えかねた蛸は、自分の足を食べ

部屋を出てすぐの壁に電話機が掛かっている。留守電の赤いランプが点っていた。アレットと足が止まる。留守になどしてはいない。電話の音には気づかずに、夕空のチャイムには反応したのか、と思った。いつから寝入っていたのであろう。私は先に電灯を点けた。エプロンをやや乱暴にキユッと結び、それから留守電テープを巻き戻した。テープは三時五十六分と報告した。

「瑞江ちゃん、おらんとね? 宮崎の大原富美です。もうすぐお母さんの命日やろ。あんた去年の三回忌に帰らんかったわね。忌日じゃのうてもいいやないね、今年くらい帰ってこんね? 私も会いたいがね。うちのおじさんは六時には寝やるかい、夜にでも電話くれんね。あんた、元気にしとるとやろ?」

ああ、富美さん——。
やや掠れた特徴ある声は懐かしかった。留守電に切り替わっても慌てもせず、あれだけ喋れるのはさすがだと感心してしまう。富美はもう八十二歳ほどになっていようか。けれど、富美を見れば、誰もそんな年齢とは思わない。整った小さな顔に、臍脂に近い深い口紅の色がクッキリとよく似合う。七時半と言ってもなお信じられない。思い出してみれば、富美は若い頃からいつも同じ色の口紅をつけている。やや浅黒い肌、それはよく似合うのだ。

富美の言う「おじさん」とは彼女の夫であるが、富美より五歳上だから高齢者である。六時に寝るとは早い就寝だと驚く。だが、身体は元気であるようだ。この老齢の夫は、富美に対して根拠のない柳の下にたまたま佇んでいるのを見て「幽霊が柳の下じゃあ、決まりすぎておろうが。それも男じや絵にならんぞなもし」と、老母はつけつけと言った。そんなことを他の人間が言ったら、癩癩持ちの父は大変なことになっただろうが、不思議にあの老母には父は甘かった。幼くして亡くした実母の面影でも見ていたのかも知れない。

この母娘は初めから、他の住人とは違って見えた。私が高校一年頃のことだが、富美は三十は優に越えていたと思う。伝手があつて、富美は市内の銀行に勤めた。母親の方は和裁の腕が秀抜で、京染店の高級注文文具服、花嫁の打掛などを縫うことの出来る人であった。娘の富美は美しかった。殊に秀でた額と生え際の美しさは、話しながらもついそこばかりに見とれるほどのだ。倍賞千恵子という女優がいるが、高い形のいい鼻も、薄い額もあの女優に似ていた。休日に母子揃って和服で出かける姿は、どこのお嬢様とお付の老局かと思われる姿に見えた。

私の父が亡くなった後も、母娘はアパートの他の住人を睥睨する感じで住み続けた。私は二十二歳で東京へ出たので、後のことはあまり知らない。けれど、その後富美の母親が亡くなり、母は店舗とアパートの大改装をした。共同炊事場の時代ではなくなりかけていた。キッチン、バス付でなければ時代に後れるのだ。逆に店舗の方は縮小し、弟の将来に備えて住居の部屋数を増やし、立派な玄関を拵えた。その時に、富美はアパートを出て、古家を借りて住んだらしい。

五十が近くなった富美を案じて、母は後妻の口を世話した。富美が大工の棟梁の後添えに納まっ

い病的な嫉妬をするのである。嫉妬妄想という病なのである。

富美は気丈で常に毅然としている人である。けれど一度だけ、こう言ったことがあった。「瑞江ちゃん、私は体の芯を冷たい風が吹き止まらん……。女でおつて自分の子を持たず、なまぬ伸の子にはお金のことで悩まされる。私は鬼子母神かねえ。業が深いのかね。本当の身内のおらん寂しさ。心が凍るごとある夜がある——」

そう言って涙をこぼしたことがあった。気丈な富美だけに私は虚を衝かれて絶句した。おじさんの病は、その後も改善の兆しはみられないのか?

私は二合の米をザッザッと力を入れて磨いた。夫婦二人でこればかりのご飯が二日は保つ。夫はビールを飲むからだ。富美は何合の米を磨ぐのだらうとふと思う。おじさんはお酒は飲まない。おかずもほとんど食べない。白身の魚なら何とか手を出す。だから富美は自身の魚をバターで調味したり、すり身にして清汁に流してみたり、米の粉と合わせて揚げてみたり、様々に工夫するそうだ。それでもおじさんは箸の先で少しつくだけである。ただ、白いご飯ばかりを黙々と食べるのだそう。

母の命日のことを富美は言っていたが、本当はおじさんの病で疲弊しきっているのではないだろうか。富美は昔から熱心なQ学会の信者であった。Q学会は日蓮宗の流れをくむ信仰団体である。そこで、地域の婦人部長とか言う役目を負っている。会員からは、信心を離れた相談もよく受けるらしかったが、富美自身はおじさんのことは誰に

たと聞いた時に、私は驚いた。あの富美が——と。しかし、電話口の母は平然としていた。「何の、よう考えてみない。他人の眼には家も係累もないただの独り身の女にしか映らん。親戚も何もない他国での晩年がいずれは来るんじや。今ならあれだけの器量やからね。若うも見える。相手は立派な家敷地を持った大工とはいえ棟梁じや。先妻の子はみんな家庭を持つておる。これが良縁でなくて何ね。世間は土台、背景のある者を信用する。富美ちゃんには過ぎるくらいの縁談じや——」

そう言つてのけた。なるほど、と思ひながら、私は母の根太い考えにも、富美の決断にも感心せずにはいられなかった。私が富美と再会したのは母の一周忌の時である。前年の葬儀には弟も私も富美には知らせ忘れたのである。母と富美はずっと交流があったらしいが、結婚後の富美とは、私は三十年以上も会っていないかった。弟も富美のことは失念していたらしいのだ。富美は母の死さえ知らなかった。後で、富美は泣いて憤って、私の実家に駆け込んで来たのであった。

料亭での一周忌には忘れずに来て貰った。富美が変わずに美しかったので、信じられない思いに私は打たれた。世の中には、ああいう人もいるのである。

十二

「うちにおいでよ。二人とも知らんでしよう」
そう富美に誘われて、法要の帰りに弟の車で富

も話さない。けれどおじさんは富美が家に見えないと、会員の家を次から次に訪ねて回り「来ておらんですか」と訊ねるのである。噂はどうに流れているに違いないが、富美自身が夫のことを相談するのは精神科医だけである。病の自覚のないおじさんを医者に連れて行くことは出来ず、事情を話して富美は特別に妄想を緩和する薬を処方してもらっているからだ。水薬なので、お茶などに小さな匙に半分ほど入れる。強い薬らしかった。それでも一向に験がない。遠くにいて却って安心な私と、ふと話がしたくなつたのではないのだろうか……。

十一

富美は、元々は我が家のアパートの住人だった人である。アパートが出来てすぐに、一階の二間続きに、老母と一緒に入居した。以前は愛媛県宇和島市の造り酒屋の内儀と娘であつたと言う。どういう理由で宮崎にやつて来て、アパートなどに住むことになつたのかは分からない。家主の父が面会した。宇和島と聞いて父は驚いたと思う。父には複雑な家庭の事情があつて、宇和島にある父方の祖父の下に預けられた幼年時代があつたから、何代か前までは宇和島藩の藩士であつたから、代々の墓も未だに宇和島の寺にある。

「アパート、貸間あります。当家」、父の筆で書かれた木札を見て、母子は偶然に入つて来たのだらう。互いに、宇和島に繋がる縁に喜び合ったに違いない。そう言えば、老母は、父と話すときには四国訛りが濃く出ていた。痩せた父が、裏庭の美の家に向つた。

後方の座席に富美と私は並んで座つた。大淀川に架かる大きな橋の傍には、フェニックスが並木を作つている。私は昔に変わらない河畔の景色を眺めていた。

富美が突然に言つた。

「うちのおじさん、ひどい妄想があるよ。嫉妬妄想というのかね、病気やそうな」

「えっ」と私は彼女の顔を見つめた。富美は前方を見つめたままである。表情は変えない。口元が固く引き締められている。どういふことなのか、と私は訊ねた。

富美の部屋の窓を、おじさんは外から釘付けにした、と言うのである。西にある六畳間を、富美は自室として、縫い物、書の稽古、読書などに使つているらしい。そこには机とミシンしかない。「主婦室ね。なぜそこを釘付けにするの?」

おじさんはその部屋に、男が毎夜のように忍んで来ると思ひ込んでいふと言う。

驚くような妄想である。そして、おじさんはただ釘付けにしたのではなく、格子を組んだ木枠をその窓に取り付けたのだと言ふ。

「連子窓ね」

彼は元大工の棟梁だ。嵌め殺しの木枠を造るくらいはお手の物なのだそう。おじさんの妄想はさらに驚くべきシーンを生み出す。

富美夫婦はベッドを並べて眠る。朝になるとおじさんは富美のベッドの脇にじつと立っている。目覚めた富美は驚いて訊ねる。

「どうしなさつたとですか」
「お前んとこに、夕べも又、男が来ちよつたね」

おじさんはうすく笑ったかに見える口元で言う。

「何を言いなさるとですか。私は一晩中、ここにおりましてしょうが」

するとおじさんは、二つのベッドの間にある層籠を漁り、鼻をかんだティッシュペーパーを掴み挙げ、

「ほれ、これが証拠じゃが」

「そんなわけはないでしょう。それはあなたが鼻をかみなさったものですわ。こうして私はここに一晩中、おったでしようが」

どんなに富美が言葉を尽くしても、おじさんの妄想は消えはしないのである。

「あなたがそんなに言いなさるなら、こうしましょう。私の手首を紐で縛って貴方の手首と結び合わせておけばどうですか。それなら私が動けば分かるでしょう」

生々しい話である。それも言っているのは富美である。八十になんなんとする女と、それより五歳年上の男の話である。第一、富美と性を結びつけて考えることが難しい。けれど、富美は平然としていた。この人が後添えに納まるまで、女として何事もなかったとは言えないが、それすら私には想像は出来ない。しかし、結婚とは必ず性が含まれるのである。何事にも超然として見える富美だけに、さもあるうと見える女よりもむしろ、闇では別人か？ と、そんな妖しい想像もつい湧く。実際に富美は赤いしごきでおじさんと手を縛りあって寝たと言うのである。老いた夫婦のベッドの間に、赤い紐が渡り合っている図を思うと、川端康成のある種の作品に見られる、冷やかな視線

空間や、老人性のエロスの世界をつい想起してしまう。おじさんは、紐で結わえあっても同じで、やはり朝になれば「又、男が来ちよったね」と言うのだそう。どうあっても、おじさんには頑なにそれが視えるらしかった。おじさんにあるのは、妄想だから、妻が盗まれていたという絵は絶えず頭の中にあり続け、消えることはないのである。

まともに聞けば馬鹿馬鹿しいようなことでもあり、驚愕もするのだが、すべて事実なのだ。それを話す富美は表情を変えない。いや、その眼は悲しみをも通り越したかに、深い孤独が滲んで見えた。クッキリと縁取られた臙脂色の口紅が、富美の顔を能面の「増女」にも「白般若」にも似て見せていた。

私は運転席の弟の背中を見た。彼はじつと前方を見詰めたままハンドルを握っていた。背中が真四角に固まって見えた。

十三

富美の家は、松や榎などの大きな樹木に囲まれた広い敷地内であった。平屋のどっしりした純和風建築であった。富美は先ず裏庭に回り、小屋のようなものを見つめた。

「バイクがないわ。出かけておんなさるようや」「おじさん、バイクに乗るの」「いつもよ」

「大丈夫なの」「まあ、ここの田舎道を走るくらいやからね。言うても聞きやるような人やない。何かあればあ

今でも時には筆を持って稽古をするらしい。孤独で行き場のない日に、富美は筆を握るのではなからうか。何となく、そんな気がした。

二日には父がいる。この日は父一人である。過去帳に載る身になっても独りか、とふと思う。

大成院明應居士 昭和三十三年十二月 俗名 薫明 四十七歳 九代

母は二十八日にいる。が、母には戒名はない。俗名と没年月、享年とその年齢だけが記されていた。これは母が新興宗教Q学会の会員だったことが原因である。昔、父の亡くなった後で、母は富美母子の折伏を受けてQ学会に入信した。その時に父が生家から持ち出した黒地に金で記された戒名札も、それを納めてあった屋根付の戒名箱も、昔のQ学会員の手によって焼かれてしまった。先祖の記録がなくなるとは困るので、過去帳なるものにQ学会の僧侶が書写したものが、今実家にある物ということになった。

母の亡くなった九月二十八日には、他に文化六年に没した滋覚院妙正大姉という人がいる。母の代から戒名は失せたのである。昔のQ学会は過激であった。他の宗教排撃は凄くて、父方は禅宗だったが、これが一番よろしくないと言っていたらしい。母が何を信じようと、自由であり私には一切関係がない。

聖性も悪魔的なものも、土俗的な因習をもすべて含めて、私は人間が人智を超えた力を信じていたい生き物であること、宗教性を内蔵した生き物であることだけに興味がある。だが、特定の信仰は持

つたで、まあ、しょうがないわね」

うーむ、と私は思った。それはそうだろうが、富美の言い方には水のような冷たさがあった。富美は完璧に近く何事も自分の裁量で捌く能力に長けているが、その自負を決して表には出さない。出さぬ自負は特有の冷たさになる。私はその時、ふとそう感じた。

家に入る前に、富美は私と弟を手招きした。富美の指差す場所に、例の嵌め殺しの窓があった。格子は思っていた以上に細かい。防腐のためか鉛色のニスまで塗られ、きつちりと窓に合っていた。美しくさえあった。おじさんの妄想は認知症の一種を思わせたが、手の覚えた仕事にはまるで狂いが無い。さすがだと感心してしまう。

富美は無言で、その格子窓の下の方をつんと指差した。何だろう、チカチカと細かく光っている。間近まで行って、私は絶句した。それは隙間もないほどに敷き詰められた有刺鉄線であった。錆びて、赤くなった鉄の棘の尖端が、立っている富美の背後から差す西日にとどこどこで鋭く光っているのだ。遠目には、薙に広げた小豆の莢か何かに見えていた。裏庭の先には、網サヤや、トマトなどの作物も見えたからである。目前で見ると錆びた鉄のトゲは、文字通りの「針の薙」であった。赤錆びた薙は夕日を浴びて、何かもの凄まじいものに見えた。私はおじさんの、異様な妄想の孤独が燃え立っているかに感じられて、ゾッとせずにはおれなかった。弟も無言で立ちすくんでいた。

十四

たないし、又そのつもりもない。

十五

富美母子は多分、宇和島を出た頃に入信したのではないだろうか。だいたいなせ、造り酒屋の家をあの母子は出たのである。そのことを富美の家に行った時に私はひよいと聞いてみた。富美の説明では、富美は身体が弱く、それは多分結核であったろうと思われるが、そのために母親は他国の医者、病院を渡り歩き、富美の病気でかなりの資産を使い果たしたと言う。それで家は傾いたと言ったが、聞きながら私はあれっ、と思った。富美から私は父親の話を一度も聞いたことがなかったからである。不思議であった。と言って、その時に無邪気に訊いてみるには、何か憚られる感じがあった。禁忌という気がしたのである。私が直感的にその時に頭に浮かべたのは、富美の母親はその造り酒屋の後添えだったのでないか、ということであった。富美は連れ子である。そういう想像も成り立つのであった。

富美の家に行った日、弟は「針の薙」を見た後で先に帰った。その後、おじさんが帰って来るまでの間に、富美は「私は鬼子母神じゃろうか……」と言って、ゆらゆらと涙を膨れ上がらせたのである。「鬼子母神」と言う語が出たのは、あの老母のこともあったからではないのか。同じ運命を辿る眷属の妙を富美が感じていたとすれば……。

母親には自分という愛情を注ぐ対象があった、だが、自分にはないのだ。わたしはあの母の独占

こうやって、二日、三日という具合に毎日その日を開けば、誰かしら昔に亡くなった父方の人々の命日が現れるわけである。

オリジナルは実家にある。私を持っているのは写本で、書き写してくれたのは富美である。裏頁の余分の白紙部分に「贈 瑞江様 平成十六年四月模写 大原富美」とある。これは郵送で届いたのである。

立派な字というか、品格のある字である。天地のバランスもきちんと納まりがよく、修練が感じられた。富美は書を習ったことのある人だろう。

妙常童女 天保七年八月 愛蔵娘

成悟院妙遠大姉 年月不明 俗名セイ

七代目愛蔵の前妻 成岳院黨居士 貞享三年十二月 初代平太夫之父

ジャガイモ入りのオムレツにトマトを切り、作り置きのカリフラワーのマリネ、オニオンスープの夕食を私は一人で食べた。オムレツは二人分作っておいた。取っておけば、喜んで必ず手を出す夫の分にはラップをかけた。七時半であった。コーヒーを飲んだ後、私は自室の棚の上にある仏壇代りの棚から過去帳を取って来た。

金色に地紋の浮いた表紙の中は、屏風畳みになっており、広げれば一月分の我が家の先祖の戒名簿が現れる。見開き二頁が一日分で、一日から三十一日まである。誰もいない白紙の日もある。一日には三人が記入されていた。

欲によって、母の生きているうちは縁談も調わなかった。今は夫の独占欲によって縛られている。その上、先妻の子供達が借金を背負ってはわたしに無心を強いる。それを冷たく排撃する我が身の苦しみ――。

そんな我が宿命というものが、淵まで溢れていたのではないだろうか。狂ったように数珠を揉みしだき、動行をする富美――。おじさんはおじさんで、頭の中の男の影に苦しみ続け、辛さのあまり「もう別れようや。離縁しよう」とまで言い出すのである。

「そんなことをしたら、私は行くところがありませんわ」

富美は苦しくとも、そう言うしかないのである。

十六

富美は待っていたのかすぐに出了。お定まりの挨拶の後で、帰って来ないかとしきりに誘った。「そうねえ、いざれ帰る気になる時もあるとは思うけれど……」

私は言葉濁した。一周忌で帰った時に、私は母の店跡の空間が、まるで廃品回収屋の倉庫のようになってるのを見て驚愕した。そこには、母の古い筆筒、硝子ケースに入ったままの日本人形、書物、画集、置時計、ありとあらゆる物が、棚に残った食品以外の商品を残した空間に、投げ込まれていた。かつての母の部屋は、上の姪が占領していた。私は怒りで身体が震えた。弟を呼び、怒鳴りつけた。店の跡は

壊して駐車場にするか、応接間風の広い部屋を造るか、今考えていると弟は暢気に答えた。だが、母の闘いの場であった場所に、不用品を投げ込むような神経ではそれはほとんど期待出来ない。私は母の遺品を出来る限り整理し、不用品は大きなビニール袋に詰めた。筆筒から母の着物を出し、画集も含めて私の自宅に送った。何枚もの着物は母の形見であるし、一枚を選んで富美にも届けた。残された着物の中には、改造できそうなものもあった。黒地に金の絵羽織などは、赤の裏を張って巻きスカートにすれば、斬新だと思えた。あらましの整理を終えた私は、翌日ホテルに部屋を取った。それとて、弟は「ここにおればいいのに。ほいでも、姉さんは昔から孤独好きやったからねえ」と、何も感じずに、私を川沿いのホテルまで送って来たのであった。

去年、三回忌の後で、弟の妻が職場のデパートの階段から転げ落ち、大腿骨折に加えて足の指まで複雑骨折をしたそうである。リハビリを含めて半年入院した後も、未だに杖を突き、脚を引き摺っているという。私は、母が怒っているのではないかと思った。店の跡が未だに乱雑のままであれば、絶対に帰らないと決めているのである。けれど、それを富美に話す気にはなれなかった。「おじさんの具合はどうなの？」

「相変わらずよ。変わったことと言えば、大きな家具が家の中から全部なくなったわねえ」富美はいつも、そのことに格別気がないような、何でもない言い方をする。こういう身についてた取りが、おじさんには富美にたどり着けない不安や疑心になるのではないだろうか。

「どういうことなの」富美の家には大きな座敷があった。見渡したところでは十二畳はありそうに見えるメインルームであった。嵌めこみの仏壇も立派であったし、大きな樹木を厚く輪切りにした座卓がデンとあるのも見事だった。しかし、圧巻は丹塗りの大きな筆筒であった。今時珍しい品であり、非常に目を引いた。富美がどこから取り寄せた品かも知れない。その筆筒も、おじさんの命令で撤去させられたという。そればかりではなく、他にも大きな家具のすべてが撤去の対象になった。富美は逆らうことは出来ずに、庭にコンテナ風の倉庫を設置して、家具を移動したそうであった。

「それならいいの？ どういうことなの」
「さあねえ、大きな筆筒の陰には人が隠れることが出来るからかねえ」
私はあつと思つた。おじさんの病はいつたどこまで行くのだろう。富美も地獄だろうが、妄想から逃れられないおじさんも地獄であろう。おじさんは色の白い、ぼつちやりとした、柔和でキレイなおじいちゃんに見えた。「私達を仲立ちしてくれた静江さんの娘さんですとよ。瑞江ちゃんと言いなさる。お母さんの法要で帰ってみえたのですよ」

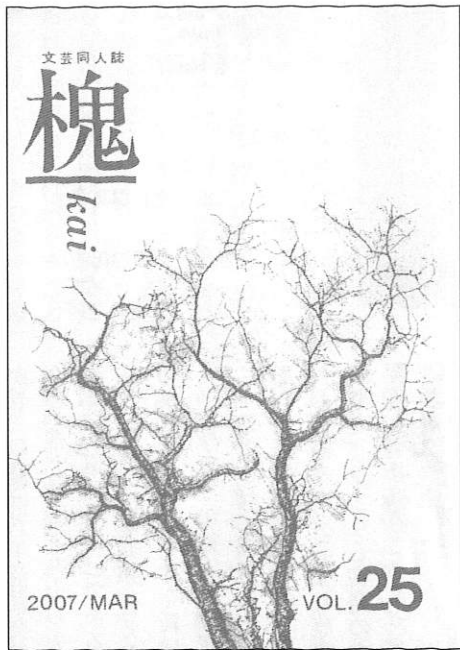
富美がそう告げると、おじさんは帽子を取って、口の中でもやもやと何か言つた。「どうも」と言つたように聞こえた。頭を下げるような、下げないような、その動作も全体に曖昧であった。そして、すぐに奥へ去つた。あの人「夕べ、お前のところに又男が来ちよつたね」と言うのか。眉籠を漁つて、これが証拠

それぞれの深紅

私はその時、パッと富美の口紅を思い出した。「ねえ、富美さんは昔から濃いキレイな臙脂の口紅だわね。ずうつとあれ、同じ色？」
「え、口紅？ そうよ、私は色が少し黒いでしょう。あれでないと引き立たないのよ」
「そうか、女性は幾つになつても、やっぱり引き立ちたいのよね」
「そりゃあ、そうですね。紅もつけなくなつたら女じゃなくなるでしょ」
「でも、うちの母はかなり前からつけていなかったわ。商店仲間と旅行したり、そういう時はおまじないほどにはしたと思うけれど……」
「あなたのお母さんは別。あの人は女を超えていた。人間として自信があつたもの。大きくてね」
「粗雑でもあつたでしょう」

だと言うのか――。人の頭は心と一体である。とほとほと奥へ消えた老人の彷徨う心は、今、家具の陰に男が潜んでいる気配を感じ続けて安らがないのだ。
「病膏肓に入る……。どちらも辛いわねえ」
「え、おじさんも辛いかしら？ あつちは病人、こつちは正気の間男よ」
富美の声がやや険しく響いた。
どうして、何をきつかけに妄想が始まつたのか、何か理由があるはずであつた。ひよつとして、おじさん自身に人妻を盗んだ過去があつたのではないか？ そういうことをした男は、加害者体験から今度はリアルな被害者となりやすいのではないか。それにはしかし、何か盗んだ側に覚えのある鍵がある。相手にふらつと惹きつけられた象徴的な何か。

「そんなことない。見るべき物はしゃんと見て、感じて、ただ言わない人やつたね。心ん中じゃ誰よりも赤い紅をつけておんなさつたかも知れんよ」
「つけない紅？」
「瑞江ちゃん、あんたずい分口紅に拘つとるね。恋でもしておるんじゃないかろうね」
「へえつ、恋？ ホホ、しているかもねえ。死んでも死なない蝟にならね」
「何ですか、それ。あんたは昔から変わったこと言いよる子やつたが、そういうとこ、変らんね」
富美が急に「ああ、電話ですよ。ほら、静江さんとこの瑞江ちゃんですよ」と、向きを変えた声を張り上げていた。



遠野明子
とおの はるこ
1943年 福岡生まれ
1977年 月刊同人誌「小説と詩と評論」同人となる
1987年 文芸同人誌「槐」創刊、代表

槐 kai

千葉県

カタツムリの如く遅々と、真剣に

創刊は一九八七年。二十一年前になる。今年六月に出た26号が最新号だから、いかにも遅々とした発行である。

初めは三人の女が、互いにそれまでいた同人誌をやめて始めた、おそらく極小の同人雑誌であろう。以後、遠野を除く二人が抜けて、昔の文学仲間だった男性二人が仲間に加わった。一人は今も「槐」を支えるメインの書き手、乾夏生、もう一人は異形の文学に注視する評論の書き手、伊藤和也であった。伊藤の本名は中里敏朗。「大菩薩峠」で知られる中里介山の甥で、介山研究でも知られていた。子のない介山の財産を相続した伊藤はいわゆるお金持ちだが、風体を見れば先ずそうは見えない。一種の奇人であり貴人でもあった。この伊藤の紹介で詩人・丸山乃里子が入会。丸山は「詩人会議」新人賞を受けた後、同誌の賞の審査委員にもなったシニール系の優れた詩人である。この丸山の実妹である中里真知子が短歌の書き手として更に加わる。彼女は伊藤和也の妻でもある。天性の童女である真知子さんを加え、該博なる知識の持ち主、伊藤和也も健在だった頃の「槐」同人会は、まことにユニーク、かつ愉快であった。し



2002年3月
「槐」20号合評会時
ゲスト＝「三田文学」編集長・加藤宗哉氏
他に五十嵐勉氏、菊田均氏も出席

かし、伊藤は八年前に突然亡くなってしまった。今、「槐」は詩人丸山の夫君、江時久（著書複数あり）、遠野の知己である木下伊津子を加えた五人で、相変わらずカタツムリの如く遅き歩みで、しかし、真剣に発行を続けているのではある。

「文学界」の同人誌評が廃止となり、時々はその取り上げて貰うこともあり、大なる励みであっただけに真に残念でならない。しかし、おそらくは商業文芸誌より歴史は古かるう同人誌は、商業文芸誌よりも初発の文学精神をより伝えて、今後も失せはしまいとカタツムリの遠野は考えている。「槐」のメンバーも六十代半ばから七十代にかかった人もいる。近代文学は終わったと言われているが、同人誌でこそ漱石、鴎外を初発とする近代文学精神は、残り続けると信じて疑わない。だが、「一年の発行ではねえ」と、心細げなる声も聞こえて来る。回数じゃない、中身だよ、と啖呵を切りたいが、その遠野自身が最新号では作品を降した。上手く行かなかったからだ。首をすくめつつ、この小さな同人誌をせめて30号までは出し続けたい願いは、「シカと、真剣に」あるのである。亡き伊藤和也よ、トレードマークの黒メガネの奥から、見守っていて下さいな。（遠野明子）

槐

〒285・0846

千葉県佐倉市上志津一七六三

二〇・二〇九

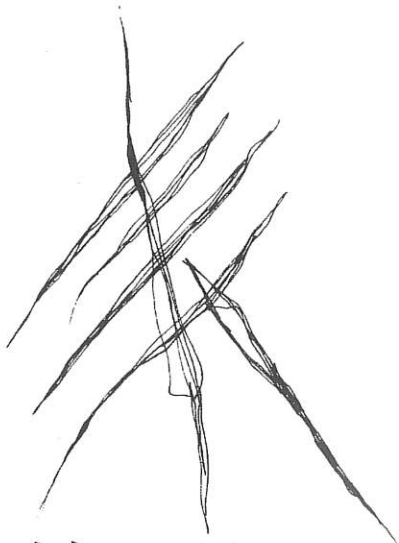
043・461・4726

同人雑誌優秀作

文芸東北

502号

賀状



鈴木信一

1

薄ぼんやりした蛍光灯のもと、十ほどある机には書類や教材の山があつて、部屋の空気は相変わらず埃っぽかった。私は真新しい教科書以外は何も置かれていない机をもう一度雑巾で拭いてから、流しに立った。そんな私を注視している人物が、部屋には一人いた。椅子の背に体をあずけた格好で、先ほどから何か言いたそうにしている。私は雑巾をゆすぎながら、次にどうすべきかを考えた。

「四十人でスタートしたクラスが、卒業時には半分以下に減る。まるで生き残りゲームですね」
どうせならと思ひ、先手を打ってみた。浜田哲男は待ってたとばかりに、
「夕方五時から九時まで。それを四年間。大変なのさ」

五分刻りの白頭を掻きながら、身を乗り出して

きた。定時制高校に勤めて二十年目になるという老教師は、いつものように色褪せた茶のコーディネートジャケットを着ていた。よれたジャケットとは対照的に、相手を物色するような目だけは今日も健在だった。浜田のそんな眼差しを避けながら、私は言葉を継いだ。

「社会人であるぶん、彼らにははじめがあるだろうし、じつは定時制で良かったって思ってるんです」

「甘いなあ。社会人が夜間だけ高校生をやるんじゃないんだよ」
「……」

「逆だよ。高校生が昼間、仕方なしに社会人をやってるんだ。勤労学生なんてのは昔の話さ。全日制に落ちた子、全日制を辞めさせられた子。集まってるのはそういう連中なんだ」

四日前に辞令交付を受け、定時制勤務であることはそのときに告げられた。N高には、そう言えば各学年ひとクラス、計百名ほどが学ぶ定時制課

程が併設されていたのである。私は何の心の準備もないまま、その日のうちにこの埃っぽい部屋に案内された。定時制職員室は、校舎の隅に捨て置かれたような、薄汚れた部屋だった。

「でも、三十代と五十代の生徒がいるって……」

「例外だよ。ほとんどが十代の子どもさ。本当なら勉強だけやったりやい時代だっていうのに、昼間は無理に働いてるんだ。歪みも出るわけさ」
「……」

「給料のほとんどを、全日制の生徒が持てないものにつぎ込むなんていうのがそれだよ」

「持てないもの？」
「久保さん、分からない？」

浜田の口癖だった。そんなことも知らないのかと言わんばかりに驚いてみせ、答えにもつたいをつけるのだ。

「見当もつきませんが」
「全日制の子が持てないものといったら、車しか